九大薬友会誌

第38号

平成27年１月20日印刷・発行編集　福岡市東区馬出３丁目１番１号　九州大学薬学部内九大薬友会事務局
印刷　小野高速印刷株式会社　大分市松原町２丁目１－６

会　長　挨　拶

九大薬友会会長　大　戸　茂　弘

薬友会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。さて、平成26年４月に薬友会会長を仰せつかり半年が過ぎようとしております。現在の厳しい社会情勢の中で、九州大学薬学部は将来を見据えた発展の布石を一つ一つ積み上げております。そして、うれしいビッグニュースを皆様にお届けいたします。平成26年10月１日付で、前薬友会会長の井上和秀先生が薬学から初の快挙となる本学の理事・副学長に就任されました。また平成26年秋の紫綬褒章を受章されました。これらの輝かしい功績は、先生の世界最先端の痛み研究・教育に加え、薬学研究院長時代の管理運営能力が高く評価されたものと思われます。薬友会および薬学研究院にとっても力強い限りです。他にも多くの成果があげられておりますので、ぜひとも薬学部ホームページ（HP）をご覧ください。

薬学の使命

薬学部は、これまで薬の研究と生産、そして医療の３分野で活躍する薬のプロフェッショナルを育成してきました。卒業生は、医薬品に加えて、化粧品、食品添加物、健康食品、環境汚染物質などを対象とした幅広い分野で、産学官のリーダーとして活躍されています。また薬学部は平成18年度より４年制と並立させ６年制が導入され、薬学府は平成22年度に修士課程、そして平成24年度に博士課程が設置され、新たな研究の展開と医療体制の構築により、国民の健康に資する魅力ある学部・学府となりました。このように、薬学には人類の健康と福祉に貢献する大きな夢が託されているといっても過言ではありません。

薬学研究院では長年にわたり「システム創薬リサーチ構想」（創薬・育薬に関する研究単位を束ね、基礎から臨床まで見渡せる研究環境の構築）を推進し、世界的な研究成果、大型プロジェクト採択など実績を積み上げてきました。前薬学研究院長井上和秀先生の執行部体制の下で、学内では「創薬育薬最先端研究基盤センター（主幹教授制度）」の設置が認められ、国の事業である「最先端研究基盤事業（化合物ライブラリーを活用した創薬等最先端研究・教育基盤の整備）」が稼働しております。九州大学独自の「大学改革活性化制度」の支援による「産学官連携創薬育薬共同研究推進による組織改革」を基軸とし、平成25年度に「産学官連携創薬育薬センター」を設置しました。一方で、概算要求では、平成25年度に【重点要求】最先端研究施設整備「九州大学（馬出）システム創薬リサーチセンター」が採択され、平成26年度末竣工予定で新研究棟が建設中です（詳細は第37号薬友会誌をご参照ください）。学共施設として利用予定で、薬学附属研究施設である「グリーンファルマ研究所（仮称）」を目指しております。本改革により強固となった人的交流や双方向性の循環型産学官･国際連携を深め、医歯薬キャンパス将来構想「産学官連携開放型国際ライフイノベーション拠点」形成に創薬・育薬の視点から貢献することを目指しております。

文部科学省の推進する「国立大学のミッションの再定義」において、九大薬の特色・強みを活かした機能強化の例として、「創薬・育薬に関する研究単位を束ねた分野横断型の教育研究体制を活かした創薬研究者の養成」、「痛み研究、グリーンファルマ研究（環境調和型の育薬研究）など独創的な研究の推進」をミッションに掲げております。平成26年度には、基幹教育が開始されました。１年次の伊都キャンパスでの基幹教育は、学部を越えて教員と学生が一堂に会して学習できる総合大学の特色に満ち溢れ、薬づくりの新たな発想が醸成されます。また２年次以降、医療系学部が同一キャンパス内に位置する病院キャンパスでは、チーム医療や創薬の連携研究が実践できる最適な環境が整備されております。国立大学附属病院では最大規模の九州大学病院に加え、臨床薬学教育センターが稼働しております。さらに九大薬独自の人と地球に優しい「グリーンファルマ研究」を推進するための創薬拠点の形成が加速化しています。一方、先輩諸氏もご存じのとおり、テニスやソフトボール大会なども盛んに行われております。これらを通じて、いかなる社会環境にも適応できる強靭な精神力を培うための教育研究環境が整備されております。

九大の推奨するアクティブラーナーとして、常にチャレンジ精神を持って、薬のプロフェッショナルの道に邁進することが「薬学の使命」です。

九州大学薬学を支えてくださる卒業生の皆様へ

現在、私たちはかつてない大変な時期にさしかかっております。４年制と６年制並立にともなう様々な調整、大学法人化に起因する多くの未解決の問題、少子化による学生数減少、国家的規模および九州大学独自の状況に起因する人件費削減のダブルパンチと、それによる人員削減と業務の加重、等々の困難な状況で、どうすれば教育の質を確保して、研究の発展を期するか、一工夫も二工夫も考案しなければ薬学は難破してしまいます。先輩諸氏が築きあげた歴史を守り今後の発展を期するには、皆さんの更なるご支援を賜らねばなりません。その具体的手法をこれから少しずつご呈示しますので、どうぞ忌憚なきご意見と共に改善策やご協力ご援助を賜れば幸いです。薬学部ホームページ（HP）も刷新され、活動する薬学をタイムリーにお見せしているところです。また薬友会HPもリニューアルをすすめておりますので、ご期待ください。よろしくお願い申し上げます。

薬友会あり方の改革について

常日頃より薬友会の管理運営にご貢献いただき心より感謝申し上げます。皆様のご協力にもかかわらず、財政はひっ迫し、薬友会の新たな船出の時期となりました。これまで、評議員会では、薬友会在り方の改革について、薬友会の活性化や運営安定の視点から議論されてきました。前回の第37号薬友会誌に「九大薬友会の在り方の改革に関する提言（井上和秀薬友会会長、赤司俊博評議員、川原章評議員）」が掲載され、会員の皆様からの意見を聴取しました。それを受けて、平成26年度の評議員会で、ホームページ（HP）立ち上げとWeb運営による活性化および健全財政へ踏み出すことが決定しました。主な変更点は、以下の３点です。

・平成26年度を区切りに平成27年度より、薬友会誌をWeb配信として、冊子体は要望に応じ、事務局で個別対応することとなりました。
・名簿は５年ごとに有償で配布することとなりました。
・会費は皆様より徴収することとなりました。

基本的には、提言に基づいて評議員会で議論し、一部修正のうえ、提言に沿って改革を実施することにしましたので、ご協力をお願いします。なお、提言と最終的な改革案の違いは終身会員にも会費納入をお願いすることです。初期に終身会員の方はおられましたが、歴史的推移の中で、名簿管理が対応できず現在に至っております。評議員会でも世代を超えて、繰り返し議論を重ねましたが、修復は不可能であり、リニューアルを契機にリセットすることが決まりました。誠に、恐縮に存じますが、ご理解とご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

薬友会の絆を強化・発展させる目的で、新たに、本格的同窓会用HPを開設することとなりました。今年度中に立ち上げ、メール等で周知させていただきます。薬友会会員の皆様、教員および学生の皆様の支部大会への積極的なご参加をお願い申し上げます。

同窓会用HPを通して、九大薬友会を、学生にとっても、卒業生にとっても、そしてご年配の方にも有益な会にしたいと切望します。学生に対しては、強力な就職戦線のサポーターとして、あらゆるチャネルを通じて九大薬学学生の就職を有利に導いていただきたいと思います。特に、企業や研究所において影響力の大なる地位にある方のご協力が是非とも必要です。卒業生にとっては、社会人として困難にぶつかった場合の良き相談相手になっていただきたいと思います。また、ご年配の方に取りましては、これまでの人生経験を後進に活かす事ができる場となっていただきたい。その総合型が近い将来の九大薬友会です。

最後に

先輩たちが残してくださった本学の確固たる地位を守り、更に発展させるために、私たちは様々に工夫をし、努力を重ねる所存です。どうぞ、いつまでも温かいご支援をたまわりたく、重ねてお願い申し上げます。最後になりましたが、皆様のご健勝を切にお祈り申し上げます。

平成26年10月吉日

井上和秀理事・副学長が紫綬褒章を受章

井上　和秀（いのうえ　かずひで）理事・副学長が、平成26年秋の紫綬褒章を受章しました。

井上理事・副学長は、九州大学大学院薬学研究科修士課程を修了後、厚生省国立衛生試験所勤務を経て、平成17年１月に九州大学大学院薬学研究院教授に就任しました。また、平成22年４月から平成26年３月まで大学院薬学研究院長、大学院薬学府長及び薬学部長を務め、教育・研究・管理運営に携わり、平成26年10月１日から、理事･副学長に就任しています。また、平成21年５月には主幹教授の称号を付与されています。

井上理事・副学長の専門分野は神経薬理学で、生理・薬理学の分野において不明であったＡＴＰ受容体の生理機能を解明し、またグリア細胞における役割を明確にしたこと、特に神経障害性疼痛発症メカニズムとして脊髄ミクログリアの活性化とそこに発現するＡＴＰ受容体の寄与を証明したことが特筆すべき功績として評価されたものです。

（九州大学ＨＰより許可を得て転載
（http://www.kyushu-u.ac.jp/topics/index_read.php?kind=&S_Category=T&S_Page=Main&S_View=&word=&page=1&B_Code=6232））

新任あいさつ

臨床薬物治療学分野
教授　増　田　智　先

平成25年９月１日付けで大学病院教授・薬剤部長として着任し、同時に薬学府協力講座として臨床薬物治療学（旧分野名：医薬品情報解析学）を担当することとなりました。

私は平成４年３月に京都大学薬学部を卒業し、博士後期課程修了後、平成10年京都大学医学部附属病院薬剤部の助手に採用され、平成25年４月に同准教授・副薬剤部長として勤務して参りました。この間、平成19年には６ヶ月間米国ボストン市Harvard Institute of Medicine / Brigham and Women’s Hospital腎臓部門にて研究する機会を得ました。幸いにも学部４年次よりこれまでの期間すべて病院薬剤部研究室において活動することができ、常に臨床を意識した研究に携わり、特に腎特異的な薬物トランスポーターのcDNAクローニングと分子細胞生物学的研究に従事してきました。最近では、薬物による腎毒性の発現をいち早く見出し、重篤化阻止を目指した非侵襲バイオマーカーの探索と臨床応用に関する研究を腎臓内科医と共同で進めてきました。さらに、肝移植患者における免疫抑制薬の個別化投与設計に向けた研究に幸運にも外科との共同研究として参

画することが出来ました。九州大学病院はさまざまな移植医療に加えてがん治療においても拠点病院として盛んなことから、これ迄の経験を活かして、診療各科と協力しながら、臨床における問題点の解決に向けた研究を展開し、九州大学病院で治療を受ける患者さんに少しでも役立てるように邁進したいと考えています。

昨今、医学教育においては「Physician Scientist」という自立して研究する医師の育成が注目されています。医薬品適正使用の最前線に位置する九州大学の薬学研究者、薬剤師の存在価値は一層高くなりつつあることから、薬学研究者、薬剤師の育成においても医学教育と同様に研究能力を備えた人材の育成が求められています。前任の大石了三先生は、神経薬理学研究の分野のみならず医療薬学、薬剤師育成・薬剤業務の進展においても高名な先生です。専門分野は異なりますが、臨床を常に意識した研究を展開されてきたことは私の信念と通じるものがありますので、これからも九州大学病院薬剤部の伝統、流れを守りながら、様々な専門領域を融合した新しい研究展開に結びつけることが出来ればと楽しみにしています。大学病院という場所は忙しく、また刻々と臨床は変化します。このような環境で臨機応変に対応できる力と研究能力を備えた薬剤師、すなわち「Pharmacist Scientist」の育成と輩出に役に立てれば幸いです。

是非とも同窓の皆様からのご支援、ご鞭撻をお願いすると共に、九大薬友会の益々の発展を祈念申し上げます。

ライフイノベーション分野
教授　津　田　　誠

2014年６月１日付でライフイノベーション分野（新設）の教授に着任いたしました津田誠と申します。私は、2005年に薬効解析学分野（現：薬理学分野、井上和秀教授）の助手として着任し、2006年より助教授（2007年から准教授）となり、現在に至っております。このライフイノベーション分野は、九州大学の大学改革活性化制度へ提示した薬学研究院の改革案が認められ、新しく設置されました。本分野設置にご尽力いただきました薬学研究院の諸先生方に厚く御礼申し上げますとともに、微力ではございますが薬学研究院の今後の発展に貢献していきたいと、決意を新たにしているところでございます。

本分野では、私が井上教授のもとで研究してまいりました慢性疼痛におけるグリア細胞の研究をさらに発展させるべく、神経科学やその領域外の先端的研究技術などを積極的に導入し、現在の治療コンセプトを変えるような新しいメカニズムの発見と産学官連携共同研究の実現を目標としております。さらに、新たな研究テーマとしてかゆみや他の神経疾患研究もスタートさせ、病態メカニズムの解明と革新的な創薬に繋げていきます。そして、生物学的側面から見た感覚の本質やグリア細胞の存在意義なども探究していきたいと考えております（詳しくは分野ホームページをご覧ください）。

現在まで行ってまいりました研究は、井上教授をはじめ、さまざまな先生方からのご指導と学生のひたむきな努力の上に成り立っております。その築き上げてきた研究や努力に対する敬意と感謝の気持ちを忘れず、それらをベースに自分の頭でさらに考え、新しいアイディアを出し実証していく研究をこれからも推進してまいります。そして、研究室のゴールを目指して、いろんなアングルから研究ができ、そして研究室のお互いがサイエンスを思う存分楽しみHAPPYになるような研究室を築いていきたいと思っております。最近はいろんな局面で若い研究者や学生にも「目に見える成果」が多く求められる傾向があり、彼らがリスクの高い挑戦的な研究を避けがちになっているように感じております。しかし、今までに例のない面白い現象を掴み、しかしそこから何がでるかわからないがもしかしたら化けるかもしれない、という研究は得てして楽しいものです。そのような研究や実験に自らが積極的にチャレンジできるような環境的工夫を行い、そこから研究のワクワク・ドキドキ感を味わってもらい、その楽しさを少しでも実体験してもらえればと思います。

本分野の活動が薬学研究院改革の一助となるよう精一杯努力してまいります。どうぞ今後ともご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

創薬産学官連携講座
客員教授　佐　藤　陽　治

平成26年１月１日に創薬産学官連携講座の客員教授としてお迎えいただきました佐藤陽治と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は平成２年に東京大学薬学部を卒業し、同大学院（毒性薬理学教室）で平成７年に学位を取得しました。その後３年半ほど米国シンシナティ大学で遺伝子改変動物の開発などの研究を行い、現在は国立医薬品食品衛生研究所に再生・細胞医療製品部長として勤務し、再生・細胞医療製品の安全性・品質評価の研究を行っています。平成26年11月施行の改正薬事法（薬機法）では、従来の「医薬品」「医療機器」の区分から独立して新たに「再生医療等製品」という製品群ができました。「再生医療等製品」は、生細胞を含む「再生・細胞医療製品」と遺伝子を含む「遺伝子治療製品」とから成りますが、当部が扱っているのは前者になります。医療行為としての再生医療ないし細胞治療の有効性と安全性を担保するためには、再生・細胞医療製品の品質の確保が必要です。

近年、イノベーションの進展に伴って、再生・細胞医療製品をはじめとする先端的医薬品が活発に開発されていますが、これらを本格的に実用化・産業化するための課題として、その有効性と安全性を恒常的に担保するための品質をどう管理したらよいのか、という問題があります。製品が先端的であればあるほど臨床使用経験が少ないために知見の蓄積も乏しく、有効性・安全性を評価するための試験法も整備されていません。当然、リスクの予測が難しくなります。最近話題のiPS細胞由来移植細胞を使った再生医療も然りです。創薬産学官連携講座では西田基宏客員教授や学生の皆様方とともに、先端的医療製品の品質とは何か、それをどう確保すれば早期実用化と患者さんの安全・安心につながるのか、という新たなフロンティアの開拓に取り組んで参りたいと存じます。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

創薬産学官連携講座

客員教授　西　田　基　宏

（自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター心循環シグナル研究部門）

薬友会会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平成26年１月より創薬産学官連携講座の客員教授に就任致しました西田基宏です。

振り返れば、平成15年10月に薬物中毒学分野（黒瀬研）の講師として着任してから平成25年７月までの10年間、九州大学で大変お世話になりました。この間、薬学研究院での研究教育だけでなく、九大薬活性化戦略にも参加させていただき、非常に多くのことを勉強させていただきました。本来ならば、育てていただいた御恩に報いるべく九大に残って貢献すべきでしたが、縁あって、平成25年８月より自然科学研究機構岡崎生理学研究所（統合バイオサイエンスセンター）の教授に就任しました。九大薬の仕事を途中で放り投げて出て行く身でしたので、破門を言われても仕方なかったのですが、井上前研究院長と大戸研究院長から「君の昇進は九大薬活性化の成果になる。今後は大学共同利用機関との連携強化に努めてほしい」と非常に前向きで温かい御言葉をかけていただき、このたび客員教授として迎え入れていただく運びとなりました。私の兼任を御認めくださった薬学研究院の先生方、特に創薬育薬産学官連携分野を引き継いでいただき、残った学部学生の面倒も快くお引き受け下さった浜瀬先生にも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

愛知県岡崎市にある生理学研究所･統合バイオサイエンスセンターではヒトの生理機能や生命の仕組みの統合的理解を目指した融合研究が推進されており、薬学とは違った視野が大きく広がりつつあります。岡崎研究所には、最先端の共通利用機器や学生・教員派遣支援制度が豊富に整備されていますので、ぜひ積極的に御活用いただけると幸いです。九大薬活性化につながる情報も積極的に発信していきますので、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

西田基宏（写真後列左から3番目）

創薬育薬産学官連携分野

准教授　浜　瀬　健　司

薬友会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。2014年１月１日付けで創薬育薬産学官連携分野の准教授に着任いたしました浜瀬健司と申します。私は東京大学大学院薬学研究科を修了後、1996年４月から九州大学薬学部の薬品分析化学分野（担当　財津　潔教授）に助手として着任し、2001年１月から同大学院薬学研究院の生体分析化学分野（担当　財津　潔教授）で助教授・准教授としてお世話になっておりました。創薬育薬産学官連携分野には、前任の西田基宏准教授が岡崎の自然科学研究機構に栄転されたことを受け、2014年１月から准教授として分野異動で着任致しました。

現在、創薬育薬産学官連携分野ではキラルアミノ酸の分析と利用を切り口として、様々な産学官連携研究を推進しております。分析面では、微量なキラルアミノ酸分析は市販の装置のみでは困難であるため、当分野で新たな分析試薬、分析カラム、装置の開発を行っています。また、キラルアミノ酸分析により新たな機能性分子が発見でき、創薬や機能性食品開発につながります。様々な疾病との相関も明らかになりつつあり、超早期診断法の開発にも役立ちます。また、薬学とは直接の関係は薄いですが、「はやぶさ」メンバーの一員として宇宙における生命の起源物質探索にも携わっております。

創薬育薬産学官連携分野は九州大学薬学部の活性化制度で新設された分野です。その名の通り多様な産学官連携研究を推進しながら、研究成果を世の中に役に立つ様々なプロダクトとして実用化、発信する役割を担っていると考えております。九大発の多くのプロダクトを発信できるよう全力で取り組んでいく所存です。どうぞ皆様の御指導、御鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

生物有機合成化学分野

准教授　谷　口　陽　祐

平成26年１月１日付けで生物有機合成化学分野の准教授に着任いたしました、谷口陽祐と申します。佐々木茂貴教授と力を合わせて、有機合成化学と生物有機化学を融合し、核酸化学を基盤とした新しい治療法の創製を目指して研究を行っております。

九州大学薬学部には学部学生の頃よりお世話になり、その後、海外留学（アメリカ、スタンフォード大学化学科）を経て、再度九州大学薬学部に助教、そして准教授として着任いたしました。その間、佐々木教授をはじめ、諸先生、諸先輩方のご支援、ご指導やご協力を賜り大変感謝しております。博士号取得までの間は、３本鎖ＤＮＡ形成人工核酸の創製に没頭し、海外留学後の平成19年４月からは助教として新テーマの立ち上げも行ってまいりました。現在、皆様のおかげで第二世代の３本鎖ＤＮＡ形成人工核酸を含め、いくつかのテーマは順調に軌道に乗っており、世界で他に類を見ない機能を有する独自の人工核酸を報告する事ができるまでになっております。今回、本稿の執筆にあたり、改めてこれまでを振り返りますと、学生の頃からご心配やご迷惑をかけたにもかかわらず、温かく見守って頂いた佐々木教授や、支えてくれた当時の学生らには深く感謝しております。その中で、有意義な時間を過ごさせて頂いたのと同時に、教育や研究を通して多くのことを学ばせて頂いたと感じております。まだまだ多くの事を学ぶ必要があり、初心に戻ってこれからも努力を惜しまず邁進していく所存でございます。

これまでに薬友会会員の皆様が築き上げてくださった九州大学薬学部のさらなる活性化に、少しでも貢献すべく積極的に様々な活動を行って参りますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

近　況　報　告

武田薬品工業株式会社　医薬研究本部
Tri-Institutional Therapeutics Discovery Institute
Director,　麻　生　和　義

薬友会の皆様、ご無沙汰しております。

私は1989年に大学院修士課程を修了後に武田薬品に入社し、研究所において創薬研究に取り組んでいます。入社以来20年以上過ごした大阪・十三の弊社研究所が、2011年に神奈川県藤沢市に移転したことに伴い、私も関西の地を離れ横浜へ転居しました。移転から２年半経過し関東での生活にもようやく慣れてきたところだったのですが、2014年４月からアメリカ・ニューヨークにあるTri-Institutional Therapeutics Discovery Institute（Tri-I TDI）への出向を命ぜられ、現在はニューヨーク・マンハッタンに在住しています。

Tri-I TDIについては、大部分の方がご存じないと思いますので、簡単に紹介させていただきます。

Tri-I TDIは、2013年10月に、Memorial Sloan-Kettering Cancer Center（MSKCC）、Rockefeller University（RU）と Weill Cornell Medical College（WCMC）によって設立された非営利の研究機関で、武田薬品が製薬企業パートナーとして加わっています。３つのアカデミアにおいて実施されている画期的な研究成果を、革新的な疾患治療に結びつけることを目的としており、各研究プロジェクトを通じて、様々な疾患領域の治療薬はもとより、希少疾患治療薬への貢献も目指しています。近年、医薬品の研究・開発のプロセスは複雑になっており、基礎研究を臨床応用研究につなげることが困難になってきています。３つのアカデミア研究機関と製薬企業が同じ研究施設内で緊密に連携することで、研究を効率的に進めることができ、医学への貢献のハードルを下げることができると期待されています。

私は、Tri-I TDIの武田側の現地代表者として勤務しています。４月に着任し、まったく何もない状況から、実験室の整備（研究機器の導入、実験器具や試薬の購入など）を Tri-TDIの側の代表者とともに始め、６月末にようやく実験ができる状況になりました。その間に、WCMC, RU, WCMCの各研究室から提案された研究プロジェクトの審査を行い、Tri-I TDIで対応するプロジェクトの決定にも参画しました。４月の着任以来、まさに新しいBiotech ventureを立ち上げるようなエキサイティングな経験をしながら日々過ごしています。６月以降、武田薬品のボストンおよび湘南の研究サイトから若手の研究者が順次加わり、現在では16名の陣容で創薬研究に取り組んでいます。各アカデミアの PIの先生方やラボのメンバーと活発な議論を重ねながら、これまで一企業の研究所で行ってきた研究とは異なった視点を持って創薬研究に取り組んでいます。３つのアカデミアとも病院を併設していることもあって、PIの先生方はプロジェクトの初期段階から常に臨床研究を意識しており、企業の研究所と環境の違いを感じる一面です。３年間滞在する予定ですので、その間に一つでも臨床研究につながるような成果が出ることを目指して日々頑張っています。

現在、マンハッタン島の東側Upper Eastsideのアパートで暮らしています。日々の仕事に追われてNew York生活を楽しむ余裕はあまりないのですが、休日には徒歩圏内にあるCentral Parkのランニングコースを走ったり、美術館を訪ねるなどして気分転換をしています。

ニューヨークに出張や観光でいらっしゃることがありましたら、ぜひ声をかけてください。

支部だより

（関東支部）

関東支部長　**秋　田　弘　幸**（17回生）

薬友会会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。九大薬学部の卒業生も平成26年３月末で第63回生となり、関東支部の会員数も増えて1000名を越す大所帯となってきました。関東支部は当初、久恒先輩（第１回生）を始めとする１～３回生の方々が中心になって、昭和30年代の初めに発足し、活動が開始されました。当初は懇親会中心の総会を開き、その後、暫く途絶えた時期もありましたが、平成９年頃まで活動されてきました。その後、星野先輩（第８回生）が引き継ぎ、次いで平成13年度からは伊田先輩（第13回生）が引き継ぎ、平成19年５月20日に開催された関東支部総会で、秋田が支部長を引き継ぐことになりました。伊田支部長になってから、総会担当幹事を「回生ローテーション制」に変え、年度毎に総会担当幹事を順送りにする方法を取り入れ現在に至っています。回生ローテーション制を導入することにより、担当回生の積極的な参加が可能となり、支部活動も年度毎に盛況になって来ているようです。関東支部の活動は年４回（平均）の集まりで、５月に総会、講演会、懇親会、８月に九州大学東京同窓会への参加、12月に反省会と次年度総会、講演会、懇親会へ向けての準備、年が明けて４月初旬に総会、講演会、懇親会についての案内発送等です。

平成26年度の薬友会関東支部会総会・講演会・懇親会についてご報告いたします。総会幹事（米本儀之氏；(33回生)）のお世話で５月

18日（日；10：30～14：45）、学士会館202号室、参加者84名（懇親会参加者74名、延べ86名）で開かれました。総会では支部長の挨拶ののち、平成26年度の支部役員の紹介と承認、平成25年度の事業報告（総会・講演会・懇親会の実施、ホームページの開設）及び会計報告がなされ、出席者の皆様の拍手により承認されました。次に、平成26年度事業計画及び予算案が説明されました。昨年度のアンケート結果に基づき、電子メール、通常はがきによる総会案内、webでの出欠確認を実施した結果、総会準備費用は約５万円の経費削減がなされたこと、webシステム運営上の留意点について次年度幹事へ申し送ること等が説明されました。26年度事業計画及び予算案の承認後、薬友会関東支部ホームページの活用状況について説明がありました。最後に、橋本氏（13回生、東京同窓会幹事）より、九州大学東京同窓会での活動報告と本年度のサマーフェスタ（平成26年８月30日（土））が青山ダイヤモンドホールで開催される等の案内がなされ、総会は無事終了致しました。

続いて講演会（11：00～13：00）に移りました。平成25年度に引き続き、(財) 薬剤師研修センター認定研修会として開催いたしました(集合研修単位１点)。三人の講演者と講演内容についてご報告致します。最初の講演者は藤井哲朗氏（53回生：厚生労働省医薬食品局審査管理課）で、演題は「薬事法改正について」でした。平成25年11月に薬事法等の一部を改正する法律が交付され、その内容は１）医薬品、医療機器等に係る安全対策の強化、２）医療機器の特性を踏まえた規制の構築、３）再生医療等製品の特性を踏まえた規制の構築にほか、一般用薬品のインターネット販売、新区分「要指導医薬品」の設置等、医薬品の販売規制の見直し等も含まれるということでした。改正法は今年度から順次施行され、法律名も「薬事法」から「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」に改められるという内容でした。二番目の講演者は山口洋介氏（49回生：株式会社ファーサス　代表取締役）で、演題は「Entrepreneurship（アントレプレナーシップ)」で起業に至るまでの体験について話されました。Entrepreneurshipとは一般に起業家精神と訳され、その内容について一言で説明するには難しく、次の３つの組み合わせからくる心の有り様ではないかと話されていました。先ず、情熱。時間を忘れて熱中することが大切。次に、能力。人より得意な何かを持っているという意味。何かに情熱を注いでいる時間は本当に幸せだが、自分だけ幸せでも駄目で、人よりうまくできることで誰かの役に立ち、情熱を継続していけるだけの利益を得ていくことも大切。最後は、行動。情熱と能力が重なるところにやってみたいことが見出せたら後は行動するだけ。三番目の講演者は前田憲寿氏（33回生：東京工科大学応用生物学部教授）で、演題は「薬用化粧品（医薬部外品）の話題」でした。ロドデノールが配合された薬用化粧品を使用した人に白斑が観察され、2013年７月４日に自主回収されることが発表されました。ロドデノールは薬事法に基づく承認を得た医薬部外品です。ロドデノールと類似の構造を有する４位置換フェノールの活性（色素細胞特異性毒性）の報告を参考にして、2.0%ロドデノール配合薬用化粧品に白斑発症が予見可能であるか否かの検証実験を行なった結果、申請用試験の用量選択における課題、承認申請時の課題等が浮き彫りになったこと、当該成分に関する様々な知見と、薬用化粧品（医薬部外品）開発における提言についてまとめて紹介くださいました。ご講演を頂きました、３人の先生方、大変お忙しい中、資料のご準備をはじめ、誠にありがとうございました。

講演会に引き続き、懇親会（13：10～14：45）に移りました。支部長の開会の辞、引き続いて最長老の石田氏（昭和29年卒、３回生）の乾杯で、歓談が始まり、新卒の中野氏の挨拶及び次年度担当幹事の34回生（吉光氏、安河内氏、神徳氏、小田氏、安永氏）の挨拶をはさみ、３年目となる「松原に」の合唱、星野氏（８回生、２代目支部長）の閉会の辞でなごやかに締めくくられました。33回生の皆様、支部役員の皆様、たくさんの方々のご協力のおかげで無事、終了しました。参加者の皆さまにも楽しんでいただけましたらなによりです。

薬友会関東支部ホームページ（http://kyushu-yakuyu-kanto.la.coocan.jp/）では、これまでの支部総会の様子を報告しておりますので、是非ご覧ください。平成27年度の総会も例年通り５月に開催予定です。以上が関東支部からの報告です。

（関西支部）

関西支部 幹事長　**尾　崎　　通**（31回生）

九大薬友会関西支部は今年度で設立30周年を迎えました。会員数は既に500名を越え、関西圏の製薬企業、大学、医療機関等において様々な分野、職種で活躍されています。

さて、関西支部ではホームページの運営、年３回の幹事会、および親睦会を兼ねた年１回の総会を主体とした同窓会活動を行なっていますが、本年度は、９月20日（土）にガーデンシティクラブ大阪において第30回総会・同窓会を開催させていただき、34名の方にご参加いただきました。今年度は関西支部発足30周年という節目の回にあたることから、例年とは一味違った内容にしようと１年以上幹事会で話し合いを重ねた結果、講演会は例年の九大の恩師をお招きする形ではなく、一つのテーマで複数の演者が時間をかけて討議できるパネルディスカッション形式の講演会を企画し、そのために開催日時を例年の平日夜の開催から土曜日午後の開催に変更いたしました。

総会では、支部長挨拶の後、前年度の活動報告および会計報告、本年度の活動計画および予算案、九大薬友会評議員会報告、次期支部役員候補の紹介および承認が行なわれました。前年度活動報告では、支部運営費の減少傾向に対する対策として、支部からの案内状を郵送から電子メールに移行することの可否を支部会員のみなさまに直接ハガキにて確認を取りまして、ご賛同いただけました会員の方に関

しましては今後メールでご連絡させていただくことを報告いたしました。九大薬友会評議員会報告では、運営費減少対策として、会員名簿の発行を３年に一度の無償配布から５年に一度の有償配布に変更することと、会員相互の情報交換を活性化するために会員専用のホームページを設立する提案が承認されましたことを報告いたしました。役員選出に関しましては、長年事務局としてご活動いただきました森浩一さん（神戸学院大、17回生）をはじめ、淀光昭さん（31回生）、緒方雄貴さん（53回生）、渕上博美さん（53回生）の４名が退任され、一方、岸昭宏さん（46回生）、渡邊健朗さん（56回生）、松田祐子さん（57回生）の３名が新たに役員として支部活動に加わっていただくことになりました。

冒頭で述べましたように、続く講演会では、『新医薬品の創生と開発』というテーマでパネル討議が開催されました。座長の永繁支部長（21回生、元田辺三菱製薬）による進行のもと、パネリストとして、製薬企業の立場から宮本政臣さん（22回生、生化学工業、元武田薬品工業）、青木高さん（１回生、青木国際ビジネス特許事務所、元藤沢薬品工業）、アカデミアの立場から藤井郁雄さん（院22回生（博）、大阪府立大学理学部教授）、そして行政・業界団体の立場から川原章さん（24回生、製薬協、元厚生労働省、元ＰＭＤＡ）による講演と討議が行なわれ、総会に参加された会員のみなさんを巻き込んで熱心な討議が行なわれました。関西支部の総会では医薬品と関わりを持つ方、特に製薬企業に勤務されている方の参加が多いことから、創薬と産官学連携というキーワードで会員のみなさんと自由闊達な意見交換ができたことは非常に意義深かったと思います。

パネル討議のあとは、パネリストとして今回特別に参加下さった川原章さんのご発声・乾杯で懇親会が始まり、一部パネリストとの討議が続く中、懇親会に参加された皆さんにはゆっくりご歓談いただけたように思います。終会前には恒例の抽選会で盛り上がったあと、最後は参加者全員揃っての記念撮影を行ない、盛会の内に総会を終えることができました。

最後に、支部設立30周年を節目に今後さらに充実した支部活動を展開できればとの思いで、これまで何回か発行して参りました関西支部の「支部便り」（文書集）の30周年記念版を作成し、総会当日に配布させていただきました。作成にあたっては多くの会員の方にご協力を戴きました。投稿下さいました方々には改めて厚く御礼申し上げます。なお、関西支部の「支部便り」30周年記念版は、総会・同窓会に参加いただけなかった卒業生のみなさまにも閲覧いただけますようにホームページに掲載いたしておりますので、ぜひともホームページに（http://yakuyu. info）お立ち寄り下さい。

九大薬友会関西支部では会員相互の親睦の輪を広めるとともに、かつて共に学んだ母校の発展のために、少しでもお役に立てることを心から願って活動しております。そのために、関西支部会員のみならず、九大薬友会全員の皆様の一層のご支援を賜りますように、今後ともよろしくお願いいたします。

（福岡支部）

福岡支部長　**野　田　浩　司（７回生）**

今日は2014年の11月３日、この原稿を書いています。気持ちよく晴れてはいますが、急に寒くなってきたようです。薬友会の皆さまにはお変わりなきことと存じます。世の中では相変わらず右寄りが続いていますが、アベノミクスの３本目の矢も失速し、消費も回復しないまま新年を迎えることになりそうです。右寄りといえば最近とくに目立つのが、「在特会＝在日特権を許さない市民の会：会長、桜井誠（本名、高田誠）」によるracist "hate speech"、"hate crime"です。特定の民族の人々に対して聞くに堪えない罵詈雑言を浴びせかけ、ときには暴行に及ぶ、一体彼ら彼女らはどういう人格・心情の持ち主なのでしょうか。哀れに思います。しかし彼らは社会に害毒を流し続ける存在であり、言論の自由とはまったく無関係の犯罪集団です。日本が一流の文化国家を自負するならば、一刻も早く対処法を制定し、きびしく断罪すべきです。

さて、毎年11月第二土曜日に開催しています恒例のよか薬会（薬友会福岡支部）総会･講演会･懇親会が、2013年11月９日に福岡ガーデンパレスで開催されました。総会では庶務および会計報告の後、薬学研究院院長の井上和秀教授（22回生）から**「九大薬学の現状：新研究棟建設」**というタイトルで、九大薬学の活発な研究・教育の現状についての報告がありました。特別講演では、九大薬学部を卒業以来、東京都健康安全研究センター微生物部に勤務し、現在微生物部長として活躍しておられる甲斐明美氏（24回生）よりお話をいただきました。演題は**「食中毒のリスクを低減させるための課題」**。要旨を紹介しますと：【甲斐氏の仕事の目的は、食の安全・安心を確保するために、微生物学的な検査、調査・研究等を行うこと。日本で最も多く発生する食中毒は、従来は、腸炎ビブリオやサルモネラ属菌によるものだったが、1998年に発生した腸炎ビブリオ食中毒は839件、サルモネラ食中毒は757件であった。しかし、これらの菌による食中毒は激減し、2012年には、腸炎ビブリオ食中毒９件、サルモネラ食中毒40件となった。代わって増加したのが、ノロウイルス、カンピロバクター、腸管出血性大腸菌O157などによる食中毒である。2012年には、ノロウイルス416件、カンピロバクター266件、腸管出血性大腸菌16件が報告されている。このような変化における課題の考察、また細菌検査法の進歩と最近のトピックスの紹介が

あった。なお、以前＜O157＞による食中毒事件が日本中を吹き荒れたが、その時に甲斐氏が開発した菌の検査法が現在もスタンダードとして広く用いられている。】

今年（2014年）のよか薬会総会・講演会・懇親会は11月８日（第２土曜日）に開催されます（福岡ガーデンパレス）。総会では、本年度より新しく薬学研究院長に就任された大戸茂弘教授から九大薬学部の研究・教育の現状紹介があり、特別講演では、産業医科大学医学部教授の谷口初美氏（21回生：微生物薬品化学教室、堀内忠郎教授）による**「細菌叢解析の環境及び臨床検体への応用 ～東北震災後の感染リスク評価を含む～」**と題した微生物学に関連した貴重かつ豊富な研究・教育および社会的活動の集大成としてのお話しを戴くことになっています。谷口さんは本年度一杯で産業医科大学を定年退職されますが、今後のさらなるご活躍をご期待申し上げる次第です。

よか薬会では、社会で活躍しておられる九大薬学卒業生を積極的にピックアップして、総会における特別講演の演者としてお願いしています。今後もそのような方々を会員の皆様からご推薦いただきたいと存じています。

さて、旧制度の卒業生と新制度の大学教員との円滑な交流を図ることは、現実的にはなかなか難しく思われます。このような中での**よか薬会**の役割はとても大きいと思っています。**よか薬会行事**への新旧会員のみなさま方の、とくに若い卒業生の、そして何にもまして薬学部現教員の方々にご参加をお願いし、より密度の高い会員相互交流の場としてよか薬会が貢献できればと、心より願っている次第です。

よか薬会（九大薬友会福岡支部）役員

会長 野田浩司（７回生）、副会長 黒木賀代子（11回生）、副会長 米澤和明（24回生）、庶務 山下正義（28回生）、会計 一木孝治（48回生）、監査 江森節子（16回生）、監査 千々和勝己（27回生）、尾石瑩子（10回生）、峯本正夫（19回生）、末宗洋（22回生）、古賀信幸（25回生）、麻生真理子（33回生）、江頭義満（34回生）

2013年度　よか薬会（九州大学薬友会福岡支部）総会
2013年11月９日　　於 福岡ガーデンパレス

（長崎支部）

長崎支部長　**淀　　光　昭**（31回生）

九大薬友会の皆様、こんにちは。

長崎支部では平成26年４月に支部長が交代いたしました。しかし、平成24年度支部総会（平成25年２月16日）以降まだ支部総会を開催しておらず、支部会員の皆様へのご報告とご挨拶ができておりません。まず、この場をお借りして、お詫び申し上げるとともに、支部長交代の経緯説明と簡単な自己紹介をさせていただきます。

私は長崎市出身で、大学院修士課程修了後、塩野義製薬（大阪）で30年間勤務し、平成26年４月に長崎国際大学薬学部に、前支部長である原田平輝志先生の後任として赴任しました。原田平先生からは研究室や担当授業科目を引き継ぎましたが、その際、長崎支部長の後任もお願いされました。大阪で関西支部の幹事長を平成16年から５年間、その後継続して幹事を務めて支部運営を経験し、また評議員会にも数回参加して薬友会の厳しい財務状況や他支部の活動状況をある程度認識しておりましたので、長崎支部へ移っていきなりの支部長は荷が重いと感じつつも、何とかなるだろうと前向きに考え、お引き受けした次第です。長崎支部のこれまでの活動を十分に把握できているとは言えませんが、長崎支部の活動をなんとか盛り上げたいと思っておりますので、支部会員の皆様、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。なお、原田平先生は現在、地元の鹿児島県で保育園の園長補佐として保育園経営に携わっておられます。

さて、平成26年度内に支部総会を開催する必要があり、平成27年３月頃に前回同様、JRハウステンボス駅近接のホテルでの開催を考えております。しかし、その前に支部会員名簿の更新も必要となります。前支部長から引き継いだ長崎支部名簿には、132名の会員が登録されていますが、20名近くは県外在住もしくは住所不明で、県内在住の実質的な支部会員数は110名強です。最新の支部会員名簿を薬友会本部より入手して、新入会員の情報を把握するとともに、支部会員名簿の整備を進めようと考えています。骨の折れる仕事ですが、支部運営で大事な仕事の一つです。因みに、関西支部では企業勤務の会員が大半でしたが、長崎支部では企業勤務の会員は非常に少なく、病院や薬局で勤務する薬剤師や大学教員が多いのが特徴と言え、長崎国際大学には20名の会員がいます（平成26年11月現在）。

各支部の役員の方々は、支部総会への参加者増加といった支部活動の活性化に頭を悩ませ、また色々と工夫をされていることと思います。平成24年度の長崎支部総会では、「薬友会運営費減少に対する対策」について議論され、「今後薬友会（長崎支部会）活動に付加価値をつける努力をする」という結論で一致しており、その方策として、まず会員間で情報共有と自由な議論を行うためのメーリングリストが作成され、また会員からの相談を受け付ける相談窓口が開設されました。しかし、残念ながらこれらは有効に活用されているとは言い難い状況です。

一方、九大薬友会のホームページがBikitaというシステムを利用してリニューアルされており、同窓会事務局からの情報発信や、会員相互のコミュニケーションの場として利用できるようになっています。また、支部別に「コミュニティ」ページも用意されていることを考えると、支部会員間の情報交換には可能な限りこちらを利用した方が良いのではと個人的には思っており、次回支部総会ではそのあたりのことも参加者と話し合いたいと考えています。

最後に、長崎国際大学薬学部には平成26年４月、私を含め４名の薬友会会員が教員として赴任し、新たに長崎支部会員となったことを報告して、長崎支部からの近況報告とさせていただきます。淀光昭（薬品製造化学研究室、教授、31回生）、西奥 剛（臨床薬理学研究室、准教授、院43回生）、高崎 伸也（臨床検査学研究室、講師、

51回生）、田上 兼輔（医薬品化学研究室、助手、61回生）

（大分支部（豊薬会））

薬友会大分支部事務局　**菅　田　哲　治**（41回生 薬製）

大分支部（豊薬会）は、赤嶺佳子先生（15回生　分析）を会長とする、会員約130名の支部です。大分県には、薬学部や大きな製薬会社はなく、会員の多くは、保険薬局、病院、行政等に勤務しています。豊薬会の活動は、年１回開催している同窓会（講演会と懇親会）を中心としています。この一年間の活動としては、２月に講演のために来県された薬剤学教授で現九大薬友会会長の大戸茂弘先生を囲んで、講演会前夜、同窓生数名が集まり、ささやかながら懇親会をおこないました。大戸先生の教え子である藤岡夫妻も駆けつけ、とても盛会に終えることができました。また、翌日の講演会は、赤嶺先生、野仲範子先生（14回生　生薬）が中心となって開催された女性薬剤師部会の学術講演会ですが、大分駅前にあるホルトホール大分で開催され、前日の懇親会に参加できなかった同窓生も駆けつけ、大戸先生の講演「患者に優しいクロノセラピィー（時間治療）」を聴講していました。

豊薬会では、現在、ベテランから若手までシームレスな付き合いができるよう各年代に幹事を置き、県内の同窓生の輪を広げる活動を考えています。今年度の同窓会は、年明けの開催を予定しています。各年代の幹事を通じ、また、新しく開設された薬友会ホームページBikitaも活用させていただきながら、より多くの方に参加いただけるよう努めたいと思います。また、今後、大分に戻ることを考えられている在校生や県外に住まれている方々に対しましても、Bikita等を活用しながら大分の情報を発信できればと考えております。

（熊本支部）

熊本支部長　**井　本　修　平**（49回生）

九大薬友会会員の皆様、お変わりなく益々ご清栄にてご活躍のこととお慶び申し上げます。熊本支部の近況報告をさせていただきます。本年度は薬友会熊本支部独自の活動は行っておりませんが、熊本では九州大学全学部での同窓会（九州大学熊本同窓会）が発足しており、第３回となる総会・懇親会が平成26年10月４日（土）に熊本全日空ホテルニュースカイにて開催されました。薬友会熊本支部の会員の皆様にもご案内を差し上げたところ、薬学部卒業生としては私を含めて４名の方にご参加頂きました。会に先立ち、九州大学法学研究院・河野俊行教授による「世界遺産を通してみる国際法と文化遺産」と題した市民公開講座が行われ、引き続いて総会・懇親会が行われました。全体の参加者では180名規模で、来賓として幸山政史熊本市長も駆けつけて頂くなど賑やかな懇親会でありました。私自身も、地元でご活躍なさっている薬学部の先輩方と久々にお会いすることができ、楽しい時間を過ごすことができました。この九州大学熊本同窓会は今後も年１回の懇親会が予定されており、熊本支部会員の皆様にはその都度ご案内させて頂きたいと思っております。こちらの会は学部を超えて在熊の様々な業種の先輩・後輩との交流を深めることができる良い機会かと思いますので是非とも多数の方にご参加頂きますようこの場を借りてお願い申し上げます。末筆ながら、会員の皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈り申しあげるとともに、熊本支部へのさらなる発展へ向けご支援をお願いしご挨拶といたします。

熊本支部連絡先：
〒860-0082 熊本市西区池田4－22－1　崇城大学薬学部　井本修平
電子メール：simoto@ph.sojo-u.ac.jp

（鹿児島支部）

鹿児島支部　事務局　**深　水　知　英**（50回生）

九大薬友会会員の皆様、お元気でご活躍のことと拝察申し上げます。

当支部では、毎年、支部総会を「お盆明けの日曜日に」開催していますが、今年も26年度支部総会を８月17日の日曜日に開催いたしました。九大薬友会評議員会報告、25年度支部会計報告、26年度支部事業計画について協議を行った後に、勉強会と懇親会を開催しました。

今年度の総会も、多岐に渡る年齢層（２回生から学部２年生に至る）の会員22名の参加を得て、盛大に開催されました。総会後の勉強会においては、２名の会員に講演して頂きました。最初に、鹿児島大学病院薬剤部　有馬由佳先生（院51回生）に「処方監査手順の改訂によるがん化学療法監査体制均てん化への取り組み」という演題で講演して頂きました。次に特別講演として、川内市医師会立市民病院　薬剤科長　福岡龍一先生（院30回生）に「薬剤師による医療安全対策への取り組みとこれからの課題－鹿児島県薬剤師会・鹿児島県病院薬剤師会の取り組みを中心に－」について講演して頂きました。

有馬先生の講演では、鹿児島大学病院薬剤部で行われている、抗がん剤のレジメンチェック体制について、事例を交えながら詳しく説明していただきました。参加者からは、素朴な疑問等も含め、活発な討議が行われました。

福岡先生は、医療安全対策の全体的なレビューから、現在、鹿児島県病院薬剤師会および鹿児島県薬剤師会で行われている薬薬連携や各会の取り組み等、詳しく説明していただき、会員一同感銘を受けた次第であります。

勉強会終了後は、恒例の懇親会を開催し、年１回の会員相互の親交を深めることが出来ました。懇親会では毎年、会員の方々の近況報告をしていただいておりますが、仕事からプライベートまでいろいろな話題が飛び出し、懇親会の最大の楽しみとなっております。今年は親子３代で参加された方もおられ、大変、楽しい会となりました。

来年は、鹿児島で日本薬剤師会学術大会が開催されます。多くの九大薬学部同窓生の方々が参加されることと思います。鹿児島でお会いできることを楽しみにしております。

教室だより

薬物動態学分野

卒業生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。現在、薬物動態学分野は家入一郎教授、廣田豪助教のお二人のご指導の元、楽しい研究室生活を送っております。

最近の研究内容として、実験系では薬物代謝酵素・トランスポーターの個人差要因解明に向けて遺伝子多型、エピジェネティクス、microRNAに着目した検討を行っています。解析系では、臨床試験、TDMデータの解析に加え、臨床検査値のみを用いたPK/PD解析を行っています。

教室メンバーは、博士課程がD３の江口駿介さん、深江さんに、D２の五反田さん、加唐さん、D１の田中君と薬剤師免許取得コースに進学したD１の舞さん。さらに、社会人博士課程の武知さんと他４名を加えた計11名が在籍しています。修士課程はM２の武居君、徳本さん、水永さん、M１の木下さん、安井君、山本君です。創薬科学科の４年生の江頭君、坂井君、玉城さんは来年度、動態の修士課程に進学します。

臨床薬学科の６年生、原田さん、重松さん、前田奈津美さん、渡邊さんは11月に卒論発表、来年３月に薬剤師国家試験を控え、大学６年間の集大成の時期となりました。５年生の柏原君、舘村さん、鶴山さん、前田梓沙さんは現在病院・薬局実習中で、４年生の江口菜摘さん、三木君は授業の合間に研究を進めながらOSCEとCBTに向けて日夜勉強に励んでいます。来年度からは、武居君が博士課程に、徳本さんが薬剤師免許取得コースに進学する予定です。この他、解析ゼミもこれまで通り活動中です。

研究室のメンバーや最近の写真、研究室の業績については動態のホームページに随時更新していますので、ぜひご覧になってください。（http://doutai.phar.kyushu-u.ac.jp/ 参照）卒業生の皆さま、お近くにお越しの際は、ぜひ研究室にお立ち寄りください。最後になりましたが、皆さまのご活躍とご健勝を一同心よりお祈り申し上げます。

臨床育薬学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか？臨床育薬学分野は今年で６年目を迎え、現在、島添隆雄准教授、窪田敏夫准教授、小林大介助教の御指導のもと、日夜研究に勤しんでおります。ご存知かとは思いますが、先生方は九州大学病院での実務実習の指導も行っておられ、相変わらずお忙しいご様子です。

当分野の新たな博士課程大学院生として、今年度４月よりEppさん、村上さんが加わりました。これにより、当分野に所属している博士課程大学院生は、小柳さん、一木さん、俵口さん、Mahyさん、岩田さん、山川さんを含め８名となりました。学部生は臨床薬学科６年の内田、徳永、米澤、５年の大園、岡、河野、土持、三浦、４年の浦山、坂本、玉田、藤木、山室の13名です。総勢24名と大所帯になり、非常に賑やかな研究室となっています。

今年度、福岡市薬剤師会と共同で行っている節薬バック運動が新聞やテレビに取り上げられました。臨床育薬学分野同門会を６月に開催し、研究室の教員、卒業生、在学生がお互いの近況を報告し合い、親睦を深めることができました。また、８月には愛媛県で行われた霧島神経薬理フォーラムに参加しました。懇親会には佐藤さんが卒業生で初めて参加し、他大学の学生と活発な議論・交流により、研究に対するモチベーションが高めることができたと思います。９月には能古島にレクリエーションに行きました。社会人博士の方々も参加し、実務実習だけでは分からない臨床現場での薬剤師の活躍を聞き、理想の薬剤師像を膨らませることができました。

研究室のメンバーや最近の写真、研究室の業績については臨床育薬学のホームページに随時更新していますので、是非ご覧ください。（http://ikuyaku.phar.kyushu-u.ac.jp/ 参照）

卒業生の皆様、近くにお越しの際には是非お立ち寄りください。最後になりましたが、皆様の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。

薬剤学分野

薬剤学分野（旧 製剤設計学分野）の卒業生の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

薬剤学研究室は、2005年４月より大戸茂弘教授が着任し、「薬を作り、よりよく育てて、正しく使うための創薬・育薬研究」、「体内時計の分子機構を基盤にした創薬・育薬研究」というテーマを掲げ、日々取り組んでいます。2014年11月７日(金)～９日(日)には、九州大学医学部百年講堂にて第21回日本時間生物学会学術大会の会長を大戸教授が務めました。「時間生物学の進歩と新たなる展開：異分野連携」とテーマを掲げ、研究室一丸となって運営を行いました。また、研究発表には多くの学生が参加し、研究室の研究成果をアピールしました。

現在、薬剤学研究室は教授の大戸茂弘、准教授の小柳悟、助教の松永直哉の３名に加え、大学院生博士課程７名、修士課程６名、学部学生11名から構成されています。博士課程３年の濵村は日本学術振興会特別研究員です。

続いて、メンバーの近況をお知らせします。博士課程３年の濵村は、研究室のリーダーとして自身の研究・後輩の指導に取り組み、

研究室を牽引しています。博士課程２年の赤嶺、原、アディラ（留学生）、博士課程１年の白水、ヌル（留学生）は、研究者としての能力を磨くため日々研究に全力を注いでいます。薬剤師免許取得コースに進学した博士課程１年の佐々木は国家試験の勉強を行いながら、研究室の運営に携わっています。創薬科学科修士課程２年の片宗、古市、渡邊は修士論文発表に向けて追い込み中です。修士課程１年の金光、木村、谷口は自身の研究に加え、研究室行事の企画・運営と、充実した毎日を過ごしています。創薬科学科４年の荻野、金堂、橋川、松田は自身のテーマが決まり、先輩方の指導のもと卒業論文に向け取り組んでいます。薬剤師コースである臨床薬学科６年の権藤、鶴留、橋本は12月には卒業論文発表、３月には国家試験と多忙な中研究を行っています。臨床薬学科５年の清水、吉田は病院実習・薬局実習で研修中です。臨床薬学科４年の加藤、東は講義・共用試験等で必死に勉学に励んでいます。

各々がそれぞれの研究テーマを持ち、日々奮闘している一方で様々なイベントも行っております。５月にはバーベキュー、８月には佐賀への講座旅行を行い、心身をリフレッシュしました。メリハリをつけることで日々の研究を質の高いものにしています。

これからも「薬剤学教室」の伝統を継承しつつ、創薬・育薬の観点から新しい研究分野の開拓に邁進して参ります。卒業生の皆様も近くにお越しの際には是非気軽に当研究室にお立ち寄りください。また、当研究室のホームページを随時更新しておりますので是非ご覧ください（http://yakuzai.phar.kyushu-u.ac.jp/）。

最後になりましたが、皆様の益々のご健康とご活躍をお祈りいたします。

薬理学分野

薬理学分野（旧 薬効解析学分野）の卒業生の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。薬理学研究室は井上和秀教授の指導の下、グリア細胞を切り口とした神経障害性疼痛のメカニズムの解明や、化合物ライブラリーを活用した新規治療薬の開発を目標に掲げ、世界トップレベルの研究を目指し日々邁進しております。

本年度は大変めでたいお知らせが２つございます。１つめは当研究室の教授であります井上和秀先生が2014年10月から九州大学 理事・副学長に就任いたしました。このことは九州大学薬学部全体にとって大変喜ばしいことであり、薬学部の今後の更なる発展に繋がると期待されます。２つめはこれまで当研究室の准教授でありました津田誠先生が九州大学薬学府に新設されたライフイノベーション分野の教授に就任いたしました。津田先生とは今後も連携を図りながら研究を推し進めてまいります。

また、2014年度日本神経化学会での増田隆博特任助教の奨励賞受賞をはじめ研究成果も着実に実を結んできています。

現在、薬理学研究室は教授の井上先生、助教の齊藤先生、特任助教の増田先生、山下先生、秘書の末宗さん、福迫さん６名に加え、研究員の高露博士、白鳥博士、大学院生博士課程２名、修士課程６名、学部学生10名、総勢26名から構成されています。

薬理学研究室では個性豊かなメンバー達が各々の長所を生かしながら、今後も世界最先端の研究を行ってまいります。研究室のメンバーや業績につきましては薬理学のホームページに随時更新しておりますので、ぜひご覧になってください。（http://yakkou.phar.kyushu-u.ac.jp ／参照）

卒業生の皆様方、お近くへお越しの際にはぜひ当研究室へお立ち寄りください。末筆ではありますが、皆様の益々のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

薬効安全性学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

現在、薬効安全性学分野は黒瀬等教授、仲矢道雄准教授、長坂明臣助教のスタッフ３名に加え、学生10名（博士１名、修士６名、学部生３名）の計13名が在籍しており、心疾患、死細胞の貪食などをテーマとした研究を中心に日々実験に取り組んでいます。

黒瀬教授は講義や学会などでご多忙な日々が続いておりますが、セミナーやミーティング等を通して学生とのコミュニケーションを大切にしてくださっています。

仲矢准教授はご多忙な中でも、学生の指導を熱心にしてくださり、力強く研究室を引っ張ってくださっています。

長坂助教は助教に着任されてから１年が経ち、ご自身の実験をこなすだけでなく、学生の指導及び研究室生活のサポートに尽力してくださっています。

続いて学生の紹介です。博士２年の渡さんは、これまで培ってきた手技と知識を生かし、多くの実験をこなすと共に、後輩に熱い指導をなさっています。修士２年の西さん、三嶋さんは進路も決まり、卒業を控え、より一層研究に取り組んでいます。修士１年は大原、大場、梶木、松田です。幹事学年の仕事をこなすと共に、それぞれの研究テーマの解明に向けて実験に励んでいます。学部４年は小野、寺脇、中山の３人です。無事に院試を終え、与えられたテーマに真剣に取り組んでいます。

以上、少数精鋭で世界トップレベルの研究を目指し日々頑張っています。卒業生の皆様方、お近くにお越しの際は研究室まで是非お立ち寄り下さい。また、ホームページが新しくなりました。研究室のメンバーや業績などの情報はホームページに随時更新しておりますので、是非ご覧ください。（http://chudoku.phar.kyushu-u.ac.jp/）

皆様の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。

（文責・大原広貴）

蛋白質創薬学分野

卒業生の皆様はますますご活躍のことと存じます。我々の研究室はOne for all, all for oneを信念に、目の色を変え、一心不乱に研究に邁進しております。本年、名誉なことに本研究室の発表論文が2014年JB論文賞を受賞することができました。また、９月に卒業された社会人博士課程の濱崎さんは、博士号を取得されるとともに、おめでたいことにご結婚なさりました！本研究室は、研究はもちろんのこと、スポーツ王国免疫の復興を目指しており、学内テニス大会も香田コーチ、小田原君サポートを中心に、決勝戦に見事進出することができました。

５月には、日本生化学会九州支部例会が行われ、蛋白質創薬学分野も他の研究室と一緒に参画させていただき、９月は、九州シンポジウムが、阿部先生指揮のもと蛋白質創薬学分野主催で行われ、白石先生のご発表もあり、大盛況で幕を下ろしました。また、講座旅行は、湯布院・別府へ行き、先生方と学生達で、親睦を深めていきました。植田先生、阿部先生も泥湯を満喫されていました。現在、植田教授、阿部准教授、白石助教、テクニカルスタッフの吉冨さん、D3:2名（中村、井川）、D2:1名（久保田）、D1:2名（藤山、渡辺）、M2:3名（下川、永井、藤崎）、B6:1名（深松）、M1:3名（菊池、香田、森谷）、B4:4名（小田原、岸川、松原、徳淵）の総勢20名の固い絆で構成されています。

研究は大変なこともありますが、そんな中でも、支え合い、時には共に泣いてくれる、人を思いやる気持ちが強い研究室メンバーです。心優しい方々に囲まれ、感謝しております。これから更に精進し、研究室の躍進に皆で貢献していきたいと考えております。

このような形で、本研究室は、蛋白質の立体構造を解析し、原子レベルで構造と機能について、考察を行っています。卒業生の皆様や本研究室に興味をもたれた方は、是非教室にお立ち寄り下さい。一同お待ちしております。

講座旅行（湯布院・別府）：高級旅館
亀の井別荘前にて記念撮影（2014年9月25日）

病態生理学分野

コラボステーションIの８階にある病態生理学分野では、准教授・野田百美の下に現在、在籍している学生は、修士２年の２名（劉 佳黛、吉村卓馬）、修士１年２名（井上 太海、朝長 大地）、臨床コース６年２名（小島 佑一郎、上土井 太志）、臨床５年１名（福尾 彩香）、創薬コース４年生（末松 史也、吉井 佑典）の９名です。

本研究室では、神経科学の分野に加え、酸化ストレスによる皮膚障害に対する保護効果について、研究を始めました。また、これまでのように、グリア細胞の研究と、肺がん脳転移および新規メディカルガス・分子状水素の神経保護作用の研究も継続して行っています。水素水の方は相変わらず広く世間の関心を引き付けているようで、九州大学シーズ集のページでは今だにアクセスランキングTOP３のナンバー１に挙げられています。

本研究室における教育活動としては、地道な神経科学・化学分野の基礎研究に邁進するだけではなく、学生の（国際的）視野を拡げ、世界で通用する人材育成を目指し、積極的に他の研究室との共同研究、研究会参加、および海外への出向を推奨しています。９月まで、イエメンからの留学生がいたので、少しは英語で話すチャンスもありました。今後、留学生は増える一方でしょうから、是非、学生さんたちには、英語でのコミュニケーションスキルも磨いてほしいと思います。また、起業を目指して新たなプログラムが立ち上がっているようですし、社会人を目指す人たちにとって、これからは会社に就職するだけではなく、いずれ自分たちで何か始めようという気概を持つのもいいのではないでしょうか。

卒業生の皆さま、お近くにお立ち寄りの際は、どうぞお気軽にお越しください。水素の話など、何でも質問にお答えいたします。

（執筆、野田　百美）

病態生理学分野のメンバー（2014年１月11日）。教室旅行で下関へ。
客員教授のホセ・フリオ・ロドリゲス氏も一緒に。

分子生物薬学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。今回は、修士課程２年崎山が報告させていただきます。

現在、分子生物薬学分野は片山教授を筆頭に、総勢19名で活動しています。就任２年目を迎えた加生助教や、ポスドクの野口といった若い研究者が中心となり、セミナーでの議論を盛り上げています。川上助教は３月に男の子が誕生し、研究に一層励む姿に、我々学生も日々刺激を受けています。

今年は、大腸菌染色体の複製開始再活性化配列DARS２の適時的な制御に関する論文が採択されました。複製開始を適時的に制御す

ることは生命活動の恒常性を保つ上で重要です。加えて、投稿間近のテーマも複数あり、日々邁進しています。

７月には講座旅行で壱岐を訪れました。青く透き通った海と新鮮な魚介類、銘酒「壱岐っ娘」を堪能でき、とても有意義でした。10月の学生実習では、修士１年を中心に３年生の実験を指導し、研究の楽しさ・素晴らしさを伝えられるよう奮闘しました。

今年の３月には、日航ホテル福岡にて旧微生物との合同の同門会が催されました。歴代教授の堀内先生、関水先生、三木先生を含め、100名弱が一堂に会し、思い出話に花を咲かせました。また、在校生と卒業生の交流も行われ、今後の進路を考える良い機会となりました。

以上、簡単ではありましたが、近状を報告させて頂きました。最後になりましたが、卒業生の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

分子衛生薬学分野

朝晩の冷え込みが強く感じられる季節となってまいりましたが、卒業生の皆様はいかがお過ごしでしょうか？現在分子衛生薬学分野では、「ダイオキシンが生殖と次世代の健康に及ぼす影響とその消去法」と「薬物代謝能力の変動に関与する要因の解明」の２つのテーマを掲げ、山田教授を筆頭に、石井准教授、武田助教のご指導の下日々研鑽に励んでおります。

衛生の顔である山田教授は昨年めでたく還暦を迎えられ、日本法中毒学会理事長、薬学研究院教育研究評議員・副研究院長など多忙な中、以前にも増して学生へのご指導に力を注がれています。石井准教授からは日々熱いご指導をいただいており、研究室が一段と活性化されています。武田助教は的確なご指導はもちろんのこと、数々の学術論文も投稿されいっそう精進されております。

博士課程３年の宮内は10月米国開催の19th North American ISSX/29th JSSX meeting のGraduate/Predoctoral 部門でBest Poster Awardsを受賞し、博士号取得後の海外留学を視野に入れ日々邁進しています。修士２年は木村、小宮、服部と女３人が、サンフランシスコやEURO-TOX 2014（英エジンバラ）の国際学会での発表の機会を頂き、貴重な体験を経て、修士論文に向け動物や細胞を相手に各人奮闘しています。博士として来年度以降も在籍する服部は日本学術振興会特別研究員に採用され、今後の研究室を牽引する存在です。修士１年は松尾、江越と男女一人ずつで、研究活動に教室の幹事に講義にと多忙な毎日です。学部生は小野村、橋田、伊豆本、栗田、西田、山口の男１人女５人が卒業研究や病院実習、または自身の研究テーマに向かい日々努力しています。博士課程には、満井、内川、竹内、および山田が、また進学予定の中国からの留学生の李が研究生として在籍し頑張っています。

以上、女性の多いメンバーで、日々活気ある研究活動を行っています。卒業生の皆様、福岡にお越しの際はぜひお立ち寄りください。最後になりますが、皆様の益々のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

生体分析化学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。本年度の生体分析化学分野の紹介をさせていただきます。

2014年１月より王子田教授率いる合成班と浜瀬准教授率いるＬＣ班が別々の研究室となり、生体分析化学分野は王子田教授の下、総勢17名で日々実験に取り組んでいます。本研究室では現在、機能性蛍光プローブの開発と生体解析応用、タンパク質ラベル化技術の開発と可視化解析応用、コバレントドラッグ創薬など、化学の力を駆使して生体機能の解析に挑む研究を行っています。

ここでメンバーの近況を報告させていただきます。王子田教授は、朝は少し遅めの日もありますが日々夜遅くまで残って研究に励んだり、熱心に指導（無理難題含む）して下さったりしています。ダイエットにも成功され、よりハンサムになられました。朝一番に研究室に到着されて実験に励む中園助教は、どんな話題にも対応できるほど多様な趣味と知識をお持ちで、研究室を明るくして下さいます。今年度より助教・二児の父となられました田畑助教はバイオテクノロジーのスペシャリストである一方、食欲旺盛でぽっちゃりに磨きがかかっています。有機合成の神として頼りになるＰＤの進藤さんは教授とダイエットトークに花を咲かせており、お散歩を趣味としています。四十肩にお悩みの秘書の北田さんは、私たちのサポートをして下さるだけでなく素敵な笑顔で癒してくれます。また学生は、Ｄ４の髙嶋さん、Ｄ３の押川さん、薬剤師コースＤ２の熊手さん、Ｍ２の川越さん、渕田さん、冷さん、Ｍ１の青山さん、鐘ヶ江さん、創薬Ｂ４の小澤くん、初山くん、三浦さん、臨床Ｂ４の岡本さんが所属しています。

最近の話題としては、Ｄ３の押川さんが第24回福岡万有シンポジウムでBest Poster賞を受賞しました。また更新が滞っておりましたホームページですが、リニューアルされ随時更新していますのでぜひご覧ください（http://bunseki.phar.kyushu-u.ac.jp/）。最後になりましたが、皆様の益々のご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。

環境調和創薬化学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。2010年に始まった当研究室も今年で５年目を迎えました。大嶋教授を筆頭に、教員・スタッフ５名、博士課程７名、修士課程６名、学部生５名の総勢23名で研究に励んでおります。現在当研究室では、環境調和型触媒反応の開発・不活性官能基の活性化・生物活性化合物の合成を軸に研究を行っています。学会発表や論文執筆も活発に行い、先輩方から引き継いだ成果が着実に形となってきています。

続いて研究室の近況を述べさせて頂きます。大嶋教授は以前にも増して多忙を極める中、学生の言葉に耳を傾け、熱心な指導やはげましを与えてくださいます。また、今年からはChemistry Cafeという院生による学部生向けの有機化学の勉強会を提案し、研究室のみならず、学部全体の教育に力を入れるとのことで、大学教授らしからぬ教育者ぶりは学生にとって非常にありがたいものと感じています。学生との距離が近いと評判の森本助教は、La(III) 触媒によるエステルの直接アミド化反応の論文が掲載されたかと思えば、日本プロセス化学会で優秀発表賞を受賞するなど活躍を続けています。最近お腹が気になる矢崎助教は、一攫千金を目指して目下株の勉強中です。日々黙々と実験をこなす渡辺特任助教は、得意のケミカルジョークで学生の爆笑を誘う一面なども見せてくださるようになりました。いつも優しい秘書の有村さんは細やかな気配りで研究室の雰囲気を和ませてくださいます。

一方学生は、頼りになる先輩Ｄ２の澁谷、清水、劉。努力家揃いのＤ１森崎、李、林、Das。センスの塊Ｍ２上杉、澤、野下。眠れる獅子Ｂ６渋田。やる気に満ちたＭ１中武、堀河、向井。病院実習まっただ中の臨床Ｂ５田村。個性あふれるＢ４君島、徳益、米嵜。

黄色い声も徐々に減り、ますます濃密さを増し有機系の研究室らしくなってはきましたが、各々元気に実験に励んでおります。

以上、簡単ではございますが、環境調和創薬化学分野の近況を報告させて頂きました。最後になりましたが、卒業生の皆様も近くにお越しの際は研究室までお気軽に足をお運びください。

生薬学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。私たちの研究室の近況を報告します。

当研究室では本年度より研究室名を生薬学分野に変更し、植物成分の生合成・代謝のメカニズムの解明、植物の細胞増殖機構・細胞死誘導機構の分子レベルでの精査を行っております。現在、森元聡教授、田中宏幸准教授、坂元政一助教３名の先生方に加え、学生９名の計15名で研究に取り組んでいます。

では、研究室メンバーの紹介をさせていただきます。森元教授は午前６時にはすでに研究室にいらっしゃって、熱心に研究されています。元気の秘訣は「学食を食べること」だそうで、毎日昼には楽しそうに食堂へ向かわれています。田中准教授は昨年ご結婚され、公私ともに充実した研究生活を送られています。どんなときでも、誰に対しても優しく紳士的な態度でいらっしゃることから、学生からは「神様、仏様、田中様」と称されています。坂元助教は研究生活だけでなく私生活でもストイックで、日々身体を鍛え上げられています。最近ではあまりの肉体改造ぶりにボディービルダーを目指しているのでは？との噂も飛び交っていますが、その真偽は分かりません。

博士課程はネパールからの留学生でトリリンガルなマダンさん（Ｄ３）、タイからの留学生で笑顔が素敵なフィンチさん（Ｄ１）、カレーと抹茶を溺愛する常浦さん（Ｄ１）の３名が在籍しています。

修士課程はおしゃれでキュートな加藤さん（Ｍ２）、いつも優しくて女子力の高い中島さん（Ｍ２）、広島カープの優勝をコイ願う河野くん（Ｍ１）の３名が在籍しています。

臨床薬学科はお酒大好き実はＭな堀くん（Ｂ６）、カピバラ系男子宮崎くん（Ｂ６）、脚力自慢の橘川さん（Ｂ４）の３名が在籍しています。

創薬科学科は、何かと自虐ネタが多い長光さん（Ｂ４）、吠えマッチョの山本さん（Ｂ４）、ポケモンマスターの吉村くん（Ｂ４）の３名が在籍しています。

このようなメンバーで日々楽しく研究生活を送っております。お時間のあるときはぜひ研究室にお立ち寄りください。

臨床薬物治療学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。今年度より、講座名が医薬品情報解析学から臨床薬物治療学へと変更になり、教授・薬剤部長の増田先生、准教授・副薬剤部長の江頭先生をはじめ、薬剤部の先生・教員方のご指導の下、心機一転研究に励んでおります。研究内容はこれまでと同様に、研究室が九州大学病院内にあることを活かして、臨床現場で問題となっている事象をとりあげ、調査研究や基礎研究を行ない、臨床現場にフィードバックできることを目的としております。現在は主に、抗がん薬による神経障害および抗菌薬・免疫抑制薬による腎障害の発現機序解明、免疫抑制薬や抗てんかん薬のLC-MS/MS法を用いた血中濃度測定法の確立、腎障害の早期診断を目的とした腎機能バイオマーカーの探索、肝移植後の免疫応答に関する研究といったテーマを中心に、研究を行なっております。新しい研究テーマも数多く立ち上がり、どのテーマも悪戦苦闘しておりますが、メンバーや先生方と議論を交わしながら、何とか成果を出せるようにと毎日夜遅くまで頑張っております。研究

室のメンバーは、それぞれのテーマの中心として、学部生を引っ張る博士課程が７名、研究室をしっかり支えてくれる頼もしい６年生が５名、病院・薬局実習を通して成長中の５年生が５名、研究室の生活と授業との両立を頑張る４年生が５名という、計22名の学生で研究に取り組んでおります。個性豊かなメンバーですが、時に笑い合い、時に励まし合いながら、良い雰囲気の中で研究しております。

最後になりましたが、卒業生の皆様、近くにお越しの際は是非とも研究室に足をお運びください。皆様の今後ますますのご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。

生物有機合成化学分野

卒業生の皆様いかがお過ごしでしょうか? Ｍ１の３人が今年度の生物有機合成化学分野を紹介させていただきます。

昨年、当研究室の教授、佐々木先生は還暦を迎えられました。去る10月に還暦パーティーを行い、大勢の先生、先輩方に集まっていただき、とても楽しい時間を過ごすことができました。佐々木先生は相変わらずお元気にご活躍なさっている中、学生との討論を日々大切にし、ゼミ等では活発な意見交換を通して指導して下さいます。また、昨年１月に准教授に就任された谷口先生と、10月に助教に就任された渕先生は自らの研究を進めつつ研究室の実質的な運営や学生への指導をして下さっています。助教の阿部先生は今年度、産休に入られており、温かい家庭を築かれています。さらに、秘書として長年勤めていただいた斉藤さんに代わり、兼本さんを迎えました。

学生に目を向けると、Ｄ３古賀さんとＭ２朴さんが秋に学位を取得し卒業しましたが、現在もなおチェコ人のポスドクJanさん、Ｄ３尹さん、Ｄ２岡村さん、江田さん、實崎さん、渡部さん、Ｄ１川良さん、村瀬さん、計８人の知識と経験が豊富なドクター陣がおり、とても頼れる存在です。また、Ｍ２の大城さん、菊川さん、羽田野さん、松枝さんはそれぞれの進路が決まり、修論に向けて実験に勤しんでおり、Ｍ１の大林、菊田、和田は幹事として研究室行事の運営をこなしつつ、研究者として先輩方に追いつこうと必死に実験しております。４年生の高崎、福田、宮崎と研究生の趙は研究生活に慣れてきており、切磋琢磨しながら実験や勉強に励んでいます。

さらに当研究室は研究活動に加え、相変わらずスポーツや学内行事にも熱く、テニスやソフトボール大会、学祭にも全力を尽くしております。

先輩方が残した業績や研究室の雰囲気は今も確実に引き継がれております。卒業生の皆様、帰福の際には是非研究室にお立ち寄り下さい。

薬物分子設計学分野

薬物分子設計学分野の近況報告です。はじめに学生メンバーの状況からお知らせします。最上級生Ｄ３の山本さんは平成26年度に学術振興会・特別研究員に採用されました。27年度からはカナダへの留学が予定されています。今は、博士論文の作成と秋のシンポジウムでの発表準備に大忙しです。

次は中国からの国費留学生・Ｄ２の楊さんです。今年９月に修士課程を修了した中国からの留学生・梅さんと方さんの相談相手だけでなく、当研究室の中で、核酸グループのリーダーとしてまさしく中核を占めています。楊さんの日本語能力も研究と同様に大変優れています。通常の報告書を十分なレベルの日本語で作成することもできるということです。

Ｍ１には潟永さん・清水さん・大渡さんがいます。この３名が研究室の諸事の遂行に中心的役割を果たしています。彼らはいろんな特技を持っています。だれがとはいいませんが、無限のスタミナで追うボールを研究に変えて頑張る人。あまり私たちになじみのない武道にはまる人。料理が趣味という男子。

学部学生の状況です。平成27年度に修士課程進学が予定されている創薬科学科４年・笹垣さん・上野さん・松崎さん、そして臨床薬学科６年の下田さんがいます。それぞれが自分の研究に主体的かつ自律的に取り組んでいます。このほかにも３名の学部学生が自らの将来の希望を実現させようと、がんばっています。

先生方についてです。末宗先生は平成27年度を最後に定年退職が予定されています。先生のことばでいえば、「完走めざして頑張りたい」ということで、学生を励ます毎日です。麻生先生は当研究室のメインエンジンとしてご活躍です。麻生先生は核酸グループを・臼井先生はヘリセングループをそれぞれ率いておられます。臼井先生は今年、ついに結婚され、公私ともに絶好調です。

お近くにおいでの折りは、ぜひとも、研究室にお寄りください。お待ちしています。

医薬細胞生化学分野

卒業生の皆様いかがお過ごしでしょうか。研究室の近況を修士１年の國吉がご報告させて頂きます。当分野では、藤田教授、宮本准教授、田中助教、杉本助教、吉田助教のご指導の下「染色体機能制御の分子機構解明とその制がん研究への応用」及び「分子標的薬を含めた創薬のリソースとしての天然化合物研究」のテーマの元で、日々研究に励んでいます。４月から杉本助教が、産休から復帰されました。

それでは簡単に研究室のメンバーの紹介をさせて頂きます。藤田教授、宮本准教授、田中助教授、杉本助教授、吉田助教授、Ｄ３が２名、Ｄ１が２名、Ｍ２が６名、Ｍ１が３名、Ｂ６が１名、Ｂ４が４名の総勢23名です。Ｄ３の會澤さんは、成果がまとまり論文作成に

着手し始めています。またD３のフランシスさんも日々研究に没頭しております。D１の渡邉さん、ホイさんは、博士課程へ進みますます活発に実験に取り組んでいます。M２の岩崎さん、榎谷さん、都地さん、そしてB６の田中さん、全員無事に就職先も決まり、現在は修論作成に向けて昼夜実験に励んでいます。同じく、M２のキンケラさん、白さんは天然物の研究に日々邁進しています。M１の嘉山、國吉、倉重は就職活動に向けて動き出しつつ着実に研究を進めています。B４は、比嘉、広中、行弘、森の４人で、元気一杯にみんな自分の実験を一生懸命こなしています。

研究だけでなく、薬学ソフトボール大会に参加したり、休日には藤田先生を含めてテニスを行ったりと充実した研究室生活を満喫しています。また、夏は講座旅行で熊本･宮崎に訪れ悠々自適に過ごしました。

私たちは今後とも研究に、日々精進していく所存です。これからも当研究室をよろしくお願いいたします。

機能分子合成化学分野

秋風が冷たくなる季節の折、卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。今年度の機能分子合成化学分野は、古賀教授をはじめとし、唐澤准教授、秋田助教授、博士２年１人、修士２年２人・１年２人、研究生１人、学部４年３人の計12人で、励まし合いながら楽しく研究生活を送っております。今当研究室では「ヘテロスピン系による機能性分子磁性体の研究」、「MRIプローブを目指した機能性分子の水溶液中での自己集合化挙動の研究」と、「新規発光分子の研究開発」の３つのテーマを枠組みとして日々研究に勤しんでおります。

４月には毎年恒例の能古島への「能古ハイク」に行き、のこのこボールやバーベキューを通して、新しく入った４年生との親睦が深まったように思います。

10月上旬には講座旅行にて、大自然に恵まれた阿蘇・久住連山へ登山する事で心身ともに鍛えられ、研究生活を送る上で重要な体力が更に向上したように感じます。また、高千穂峡ではボート乗りを経験したり、郷土料理を堪能したりと日々の疲れを癒す事ができました。

今年の秋、東北大学で開催された「基礎有機化学討論会」では、日頃の研究成果を発表する良い機会となり、他の研究発表を見る事で己の見聞を広める事ができ、今後研究を進めていくにあたり色々な刺激を受けて帰ってくる事ができました。

来年度は本研究室の20周年となります。この20年という、先輩方がかつて過ごされて作り上げてきた歴史と伝統あふれる古賀研究室、近くへお越しの際にはぜひ、研究室にお立ち寄りください。

細胞生物薬学分野

卒業生の皆様、お変わりなくお過ごしでしょうか？

細胞生物薬学分野一同は、田中嘉孝教授のご指導の下、日々実験に励んでいます。現在は、１）膜タンパク質の輸送および分解の分子制御機構の解明、２）癌細胞表面抗原の細胞内動態に関する研究、３）リソソーム生合成調節機構の解明 ４）メラノソームの形成機構に関する研究（美白の科学）、５）皮膚老化の研究　などを行っています。

さて、以下に簡単ながら研究室のメンバーを紹介させていただきます。教授の田中先生は、相変わらず夜遅くまで、学生の指導に、研究アイディアの捻出にと忙しい日々を過ごしていらっしゃいます。実験報告会での的確なご指導には研究室一同身がひきしまる思いです。准教授の西村先生は、授業に、実験にと精力的に仕事をされています。助教の廣田先生と藤本先生は、学生の指導に実験に大忙しの日々を過ごされています。本年４月より加わった特別研究員の栗原さんは、学生達の兄貴分として奮闘されています。修士１年の太田君はマイペースに中島さんはがむしゃらに、日々頑張っています。臨床５年の佐藤さん、末弘さん、徳重さんは、今年は病院・薬局実習でなかなか研究室では会えませんでしたが、ひと回り成長して戻って来てくれるでしょう。創薬４年の後藤さんと張さんは、徐々に実験にも慣れ、二人で切磋琢磨しながら遅くまで実験に励んでいます。創薬４年の野田君と早田さんも授業が詰まっている合間を縫って、こつこつと頑張っています。このようなメンバーで今後も研究生活に邁進し、研究室をもり立て、細胞生物学の分野に多少なりとも貢献できるよう日々邁進していく所存であります。お近くにお越しの際はぜひ、当研究室にお立ち寄り下さい。

最後になりましたが卒業生の皆様におかれましては、ますますの御繁栄をお祈りすると共に、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

機能分子解析学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。今年は代表して修士１年の雑賀・式町が近況を報告させていただきます。

本年度の機能分子解析学分野は総勢19名に増え、お忙しいながらも温かく見守ってくださる山田健一准教授と安川圭司助教のもと、日々研究に励んでおります。今年も酒井先生は熱心に合成を続けられており、合成班に欠かせない存在です。安川助教と今年から特任助教になられた山崎さんはお子様も誕生され、研究者と新米パパの２役をこなされています。また、今年は韓国からの訪問教授である韓相国教授とタイから来られたPaveena Yamanontさんも加わったため国際色豊かになり、研究室内には拙い英語もとびかうようになりました。D３のトンさんはついに卒業にむけ、昼夜実験に追われながらも我々後輩にアイスを買ってくれるなど、皆に頼られる先輩です。姉御的存在のD２の山中さんは現在実習中、終わったら国試勉強と、お忙しい毎日を送られているようです。大阪大学で実験されていたD２の松岡さんも戻ってこられ、バンド活動と研究の両方を精力的にこなさています。M２の井手さん・白水さん、６年生の大椨さんは無事就職先も決まり、卒業発表や修論にむけてラストスパートをかけておられます。我々M１と５年生（中村・日下部）は仲が良いのが自慢で、就職活動を見据えつつ、日々実験に苦戦を強いられています。創薬の４年生（進藤さん、石田君）は院試に合格し、先輩方に追いつこうと必死に実験を頑張る一方で、臨床の藤木さん・

榎木君も忙しい授業の合間を縫って少しずつ実験を進めています。

この夏は、講座旅行として下関に行き、グルメや海を満喫しました。天候には恵まれませんでしたが、雨が降る中で花火をしたことも良い思い出となりました。また、秋の薬学部の学祭では恒例となったお揃いのパーカーを着るなど、イベントも楽しんでおります。

最後になりましたが、ご来福の際には研究室に是非お立ち寄りください。

創薬育薬産学官連携分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。昨年度に西田准教授を分野長として発足した創薬育薬産学官連携分野は本年度から浜瀬准教授（前生体分析化学分野）が長に就かれ、それとともに生体分析化学分野のHPLC班が本分野に異動しました。生体分析化学分野を卒業された皆様は、これからは創薬育薬産学官連携分野の方もよろしくお願いいたします。現在は西田先生のもとで研究をしていた臨床５年生の４人、秘書の北田さんとともに総勢18名で日々熱心に研究に取り組んでいます。また、今年の９月には第２回D-アミノ酸国際会議の運営をさせていただきました。世界中から参加いただいた方々と英語で研究のことについて話をすることができたことは非常に良い経験になりました。

浜瀬先生は今年度も日本もアジアも飛び越えて世界中を飛び回り、ご多忙な毎日を過ごされています。ご当地のお土産が研究室メンバーのいつもの楽しみになっています。昨年から特任助教に就任されている三次先生は、常に周囲への気配りを欠かさず、実験等で悩んだときは相談に乗っていただける、学生の皆から尊敬されている研究室のお姉さん的な存在です。また学生陣は今秋、学位を取得された社Ｄ３の唐川さん、オーストリアで優雅な休暇を過ごされたＤ３の大山さん、薬剤師免許を取得されて戻ってこられた古賀さん、オーストリアで男性に惚れられたＭ２の鬼ヶ原さん、薬剤師Ｄに進まれる米永さん、国家試験に向けて勉強中のＢ６の横井さん、Ｍ１の石郷さん、病院･薬局実習に励むＢ５の重松さん、高吉さん、永井さん、松金さんに加え、今年度から創薬Ｂ４の才津さん、佐藤さん、臨床Ｂ４の小林さん、前田さんも加わり、賑やかな研究室となっています。最近の話題としては、「第32回九州分析化学若手の会」でＤ３の大山さんが「ベスト質問賞」を、「第２回D-アミノ酸国際会議」でＭ１の石郷さんが「ベストポスター賞」を受賞しました。また、Ｄ３の古賀さんが「QREC」に採択されました。教室の詳しい様子はホームページ上でもご覧になれますので（http://soyaku.phar.kyushu-u.ac.jp/）、こちらも宜しくお願いします。以上、研究室の紹介をさせて頂きました。最後になりましたが、皆様のご多幸とご健康を心よりお祈り申し上げます。

創薬腫瘍科学講座

皆様いかがお過ごしでしょうか。

私共の創薬腫瘍科学講座は平成19年５月に開講して以来、早８年目となりました。我々の研究室は、①血管新生や炎症性細胞浸潤、リンパ管新生などの“がんの間質応答”を標的としたがんの悪性進展を抑制する創薬研究と　②分子標的薬の個別化治療の基礎基盤を構築する上で薬剤の獲得耐性のメカニズムに関する分子腫瘍学研究の２つをメインテーマに日々研究を進めています。

現在の教室員は教授１名、助教１名、博士３年１名、博士２年１名、博士１年２名、修士２年２名、学部６年１名、研究員１名、秘書１名の総勢11名で研究に励んでおります。小野眞弓教授は論文作成や実験指導、授業、さらに国内外の学会活動に多忙な毎日を送っていますが、皆が研究の楽しさを感じられるように常に考慮されております。このような環境のもとで、博士課程の学生は自分の実験以外にも下級生の実験指導なども積極的に行っており、上級生としての自覚が出てきております。また修士の学生は12月に行われる薬学会九州支部大会での学会発表と修士論文発表を控え、積極的に実験や勉強を行っており、実験台やクリーンベンチなどの実験機器は順番待ちが出る程です。

創薬腫瘍科学講座の研究の目標は、がんの悪性進展や薬剤耐性に関与するメカニズムを明らかにしながら、独自の標的分子や標的細胞を明らかにすることでがん治療に貢献することです。特に当研究室においてはがんの特性を把握するために、がん細胞と周囲環境応答（血管新生、リンパ管新生、炎症反応など）を含むがん間質の両方で標的分子／細胞を探索し、それらのシーズについてがん患者の病理学材料を対象にしてがんの悪性進展との関連性を検討しております。さらにがん悪性進展に関する我々の分子腫瘍学研究に加えて、分子病理学や臨床腫瘍学、さらにバイオ統計学の研究分野と協力して臨床的に有用性のある標的分子を同定して創薬へ結び付けていくところが、私共のがん創薬研究の大きな特徴です。

教室の学生や研究員が各々独立したテーマで研究を進めつつ、互いに協力しながら“新しいがん治療を九州大学薬学研究院から世界へ発信する”ことを目指して、全員一丸となって頑張っております。どうぞこれからも、皆様方からの“創薬腫瘍科学講座”へのご支援とご指導を宜しくお願い申し上げます。

叙位・叙勲

【叙勲】
井上　和秀　九州大学理事・副学長：
紫綬褒章　2014年11月３日

受賞

小柳　悟（薬剤学）：平成25年度日本薬物動態学会 奨励賞 2013/10/10　時計遺伝子を基盤にした薬物動態制御因子の概日変動メカニズムに関する研究

安川圭司（機能分子解析学）：平成25年度　SEST奨励賞 2013/10/26　磁気共鳴法を用いた消化器系疾患におけるレドックス動態の研究

清水悠平（環境調和創薬化学）：優秀ポスター賞（第104回有機合成シンポジウム2013年【秋】）　2013/11/6　トランスアミド化を利用したアミドの脱アシル化反応の開発

楠瀬直喜（薬剤学）：第20回日本時間生物学会学術大会で優秀ポスター賞　2013/11/11　神経障害性疼痛の概日リズム制御に関わるグルココルチコイド標的遺伝子の探索

大嶋孝志（環境調和創薬化学）：平成26年度日本薬学会学術振興賞　2013/11/26　亜鉛四核クラスター錯体による環境調和型触媒反応の開発と反応機構解析

Takashi Ohshima（環境調和創薬化学）：The Asian Core Program Lectureship Award （The 8th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia （ICCEOCA-8）/The 4th New Phase International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia （NICCEOCA-4））　2013/11/26 Catalytic Chemoselectivity Conjugate Addition of Alcohol over Amine

仲矢道雄（薬効安全性学）：日本薬学会奨励賞　2013/11/26　アポトーシス細胞の貪食の分子メカニズムに関する研究

横手友紀（環境調和創薬化学）：第30回日本薬学会九州支部大会　優秀発表賞　2013/12/7　含窒素複素環配位子を用いた高活性かつ再利用可能な亜鉛触媒の開発

上杉修平（環境調和創薬化学）：第30回日本薬学会九州支部大会　優秀発表賞　2013/12/7　アミン共存下におけるアルコール選択的触媒的共役付加反応

山﨑俊栄（機能分子解析学）：第30回日本薬学会九州支部大会　優秀発表賞　2013/12/7　ニトロキシドによるラジカル反応および消光機構を利用した脂質ラジカル検出手法の開発

井上和秀（薬理学）：平成25年度九州大学研究活動表彰 2013/12/10

津田　誠（薬理学）：平成25年度九州大学研究活動表彰 2013/12/10

白鳥美穂（薬理学）：第87回日本薬理学会年会　優秀発表賞　2014/3/22　Chronic itch requires STAT3-dependent reactive astrocytes in the spinal dorsal horn

西原弘朗（薬効安全性学）：優秀発表賞：第87回日本薬理学会年会　2014/3/24　心筋梗塞時におけるロイコトリエンB４受容体の役割解明

森崎一宏（環境調和創薬化学）：九州大学学生表彰 2014/3/25

上杉修平（環境調和創薬化学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/28　アミン共存下におけるアルコール選択的触媒的共役付加反応

澤　真尚（環境調和創薬化学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/28　ケチミンに対する直接的触媒的不斉アルキニル化反応の開発

野下めぐみ（環境調和創薬化学）：日本薬学会第134年会 学生優秀発表賞　2014/3/28　カーバメート及びウレアの脱保護反応の開発

川良健祐（生物有機合成化学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/28　5-ヘリセンリガンドのキラル平衡及びDNAのB-Z遷移に基づく動的な不斉誘起の検討

坂本裕哉（臨床薬物治療学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/28　バンコマイシン誘発尿細管上皮細胞障害発現における活性酸素種の役割

藤原理沙（環境調和創薬化学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/29　希土類トリフラートを触媒とするエステルの直接アミド化反応の開発

林　璐（環境調和創薬化学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/29　Dual Platinum and Pyrrolidine Catalysis in the Direct Alkylation of Allylic Alcohols: Selective Synthesis of Monoallylation Products

宮内　優（分子衛生薬学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/30　UDP-グルクロン酸転移酵素（UGT）との相互作用によるシトクロムP450 3A4の機能の変化：UGT2B7内腔側ドメインとcytosolic tailの協調によるCYP3A4の抑制

小宮由季子（分子衛生薬学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/30　ダイオキシンによる肝ロイコトリエンB4合成系への影響：肝障害との関連性

園　鑫（機能分子解析学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/31　DSS大腸炎マウスにおけるNOのCD14-NFκBシグナル増強への関与

松岡悠太（機能分子解析学）：日本薬学会第134年会　学生優秀発表賞　2014/3/31　アスコルビン酸の高感度な検出に向けた新規蛍光プローブの開発

牛尾聡一郎（臨床薬物治療学）：第31回日本TDM学会・学術集会 口頭優秀演題賞　2014/5/31　LC-MS/MS法を用い

た免疫抑制薬およびその代謝物の同時測定法の構築

劉　書伶（創薬育薬産学官連携）：第21回クロマトグラフィーシンポジウム優秀発表賞　2014/6/6　Establishment of a Two-Dimensional Chiral HPLC System for the Simultaneous Determination of Lactic Acid and 3-Hydroxybutyric Acid Enantiomers in Human Clinical Samples

清水悠平（環境調和創薬化学）：ベストディスカッション賞（第24回万有福岡シンポジウム）　2014/6/7

押川祐二（生体分析化学）：第24回万有福岡シンポジウム　Best Poster賞　2014/6/7　アミンpKaの動的変化を利用した蛍光センシングシステムの開発

渕　靖史（生物有機合成化学）：ベストポスター賞　第24回万有福岡シンポジウム　2014/6/7　水素結合錯体形成を介した８－ニトログアノシンに対する共有結合捕捉分子の開発

服部友紀子（分子衛生薬学）：九州大学QRECアカデミックチャレンジ2014に採択、研究課題「ダイオキシンによる発育障害：周産期児の成長ホルモンに着目した解析」2014/6/19

谷口　陽祐（生物有機合成化学）：公益財団法人 武田科学振興財団「2014 年度 薬学系研究奨励」　2014/6/23　ピンポイント酸化損傷塩基検出法を基盤とした新規遺伝子標的診断法の開発

中武大貴（環境調和創薬化学）：最優秀発表賞（第51回化学関連支部合同九州大会）　2014/6/28　含窒素複素環配位子を用いた新規亜鉛触媒の開発

大城郁也（生物有機合成化学）：最優秀発表賞　第51回化学関連支部合同九州大会　2014/6/28　金属応答性ピリミジン型機能性人工核酸を用いたアデニン特異的RNA修飾法の開発と機能解明

下田和摩（薬物分子設計）：第51回化学関連支部合同九州大会　有機合成化学分野 優秀ポスター賞　2014/6/28　デンドリマー構造を利用した骨親和性キャリアー分子の設計と合成

増田隆博（薬理学）：Purine2014 Best Poster Prize　2014/7/25　VNUT contributes to the pathogenesis of neuropathic pain after nerve injury

石郷翔人（創薬育薬産学官連携）：九州分析化学若手賞　2014/7/26　二次元キラルHPLC-MS/MSを用いるタンパク質中の微量D-アミノ酸残基検出法開発

大山　翼（創薬育薬産学官連携）：第32回九州分析化学若手の会夏季セミナーベスト質問賞　2014/7/26

江田裕則（生物有機合成化学）：優秀ポスター賞　生体機能関連化学部会若手の会 第26回サマースクール　2014/7/29　DNA上の繰り返し領域へ協奏的に集積するヘキスト誘導体の合成と評価

森本浩之（環境調和創薬化学）：優秀発表賞（日本プロセス化学会2014サマーシンポジウム）　2014/7/31　希土類トリフラートを触媒とするエステルの直接アミド化反応の開発　Lanthanum（III）Triflate-Catalyzed Direct Amidation of Esters

岡村秀紀（生物有機合成化学）：IS3NA A. Holy IRT Poster Awards　（XXI Round Table on Nucleosides, Nucleotides and Nucleic Acids）　2014/8/24　Selective CG base pair recognition by pyrimidine nucleosideanalogues in all four flanking pairs within antiparallel triple helix DNA

大原広貴（薬効安全性学）：優秀発表賞：生体機能と創薬シンポジウム2014　2014/8/28　心筋梗塞時におけるロイコトリエンB４受容体の役割

大場悠生（薬効安全性学）：優秀発表賞：生体機能と創薬シンポジウム2014　2014/8/28　GRK5はBMPシグナルによる骨形成を抑制する

大場悠生（薬効安全性学）：優秀発表賞：次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2014　2014/8/30　BMPシグナルによる骨形成におけるGRK5の役割

石郷翔人（創薬育薬産学官連携）：第２回D-アミノ酸国際学会ベストポスター賞　2014/9/5　Establishment of a two-dimensional chiral HPLC-MS/MS system for the determination of trace amounts of D-amino acid residues in proteins

森崎一宏（環境調和創薬化学）：ポスター賞（第31回有機合成化学セミナー）　2014/9/19　ケチミンに対する直接的触媒的不斉アルキニル化反応の開発

服部友紀子（分子衛生薬学）：平成26年度 日本薬学会　環境・衛生部会　優秀若手研究者賞　2014/9/19　ダイオキシンの胎児期曝露による出生児発育障害の新規機構：周産期児の成長ホルモン低下に着目した解析

伊豆本和香（分子衛生薬学）：平成26年度 日本薬学会　環境・衛生部会　新人賞実行委員長賞　2014/9/19　ダイオキシンによる育児期母体のプロラクチン低下と機構および児の成熟への影響

増田隆博（薬理学）：2014年度日本神経化学会　奨励賞　2014/9/30　IRF転写因子ファミリーによる活性化ミクログリアの表現型制御

服部友紀子（分子衛生薬学）：第87回日本生化学会大会若手優秀発表賞　2014/10/17　ダイオキシンによる成長遅滞と脳分化抑制：周産期成長ホルモン抑制の役割

宮内　優（分子衛生薬学）:19th North American ISSX/29th JSSX meeting（San Francisco, CA, USA; Oct. 19-23, 2014）Graduate/Pre-Doctoral Poster Awards　2014/10/22　Suppression of cytochrome P450 3A4 activity by UDP-glucuronosyltrasferase（UGT）2B7: the role of charged residue(s) in the cytosolic tail of UGT2B7

ニュース

神経障害性疼痛の原因タンパク質としてIRF5を突き止め、Nature Communications誌に発表し、Nature Japanから注目論文として紹介されました。（薬理学）2014/5/13

The Skin's Circadian Rhythm　Skin Hydration Ebbs and Flows by the Clock　Wall Street Journal（薬剤学）2014/5/27

臼井一晃助教らの「白金触媒による置換アズレン類の新規合成法」に関する研究成果が「SYNFACTS誌」にハイライトとして紹介（薬物分子設計）2014/11/1

平成26年度　九州大学大学院薬学府修士課程 奨学特別選抜 合格者一覧

大園　由衣　（薬理学）
御厨　颯季　（薬理学）
田島　諒一　（薬理学）
菊田　健司　（生物有機合成化学）
大林　秀都　（生物有機合成化学）
和田　真由子（生物有機合成化学）
谷口　真理恵（薬剤学）
松田　翔一　（薬効安全性学）
森谷　真衣　（蛋白質創薬学）
石郷　翔人　（生体分析化学）

日本学術振興会　特別研究員　採択者

平成26年度

DC2　井川　達弘　（蛋白質創薬学）
DC2　山本　耕介　（薬物分子設計）
DC1　森崎　一宏　（環境調和創薬化学）

（氏名、配属分野は順不同）

平成26年度
九大薬友会　評議員会議事録

【日　時】 平成26年５月31日（土）12時30分より15時15分まで

【場　所】 九州大学薬学部　会議室（中央棟２階）

【出席者】 評議員定数：役員17名；クラス評議員64名（重複３名）の合計81名。出席者数30名、委任状40名。

役　　員： 大戸茂弘会長、岩崎正武副会長、山田英之副会長、星野修副会長、山田健一庶務理事、松永直哉会計理事（新）、齊藤秀俊会計理事（旧）。

支 部 長： 秋田弘幸（関東支部長）、尾崎　通（関西支部、永繁昌二支部長代理）、野田浩司（福岡支部長）、淀　光昭（長崎支部）、菅田哲治（大分支部、赤嶺支部長代理）、井本修平（熊本支部長）、北園正人（鹿児島支部長）。

クラス評議員： 宮川卓也、菅沼佑子、占部美子、塩川みほ子、江森節子、小川建志、唐澤博順、山口政俊、樋口　駿、赤司俊博、川原　章、飛松雅代、野田百美、小野容子、大庭義史、山口知香（順不同敬称略）。

会議に先立ち、大戸茂弘会長より九大薬友会会則第19条1項の評議員会の定足数について説明があり、評議員会が成立したことが述べられた。

また、同条２項に基づき本会の議長は会長であることが説明された。

【報告事項】

１．平成25年度事業報告

平成26年度に新しい研究棟が立つこと等、九大薬学研究院で現在行われている改革について報告された。

資料に基づき報告がなされた。

２．各支部の活動状況の報告

関東支部、関西支部、福岡支部、長崎支部、大分支部、熊本支部、鹿児島支部、の活動状況報告、並びに今年度の活動計画について報告がなされた。

【議　題】

１．役員の改選

平成26年度の役員、支部長、評議員について資料に基づき説明がなされ承認された。

２．平成25年度九大薬友会会計報告

平成25年度の会計報告がなされた。

植田正監事の監査の結果、問題ないことが報告され、平成25年度会計報告が承認された。

3．薬友会在り方の改革について

資料に基づき説明がなされ、以下の事項が決定した。

・終身会費および70歳以上会費免除について経過措置を経て、平成27年度より廃止することとなった。

・名簿は５年に一度有償配布する。

・薬友会誌は、平成26年度まで郵送し、平成27年度からはHP上などにて配信する（過渡的な措置として事務局に連絡頂ければ対応する）。

・新たに、本格的同窓会用HPを開設することとなった。今年度中に立ち上げ、メール等で周知する。

・以上の点に対して、会長名で今年度の薬友会誌などを通じて周知する。

4．平成26年度九大薬友会事業計画（案）

資料に基づき、平成26年度九大薬友会事業計画案が説明され、計画が原案のとおり認められた。

5．平成26年度九大薬友会予算（案）

平成26年度予算案の説明が行われ、原案通り予算が承認された。

6．その他

・在学中から九大生涯メールアドレスの取得などを積極的に促す。

・議事録案をメールにて役員等に配信する。

・現役の先生方の各支部総会への参加をお願いしたい。

・福岡支部：大学や評議員の方から若い理事候補者の推薦をお願いしたい。

・各支部の情報を、本人の同意の下、本部にフィードバックすることを考えて頂きたい。

・評議員の意思確認等も含め、事務局で対応する。

・各学年の評議員を通じてメール等でも情報発信する。

九大薬友会会計報告

平成25年度　九大薬友会決算

【収 入】	
薬友会入会金（73口）	438,000円
年会費（989口）	2,967,000円
UFJニコスカード（68口）	204,000円
預金利息	140円
寄付金	60,000円
小　計	3,669,140円
平成24年度繰越金	1,933,971円
合　計	5,603,111円
【支 出】	
年会費通知発送費	465,825円
球技大会補助費	20,000円
薬友会誌発刊費	796,029円
薬友会名簿発刊費	0円
九大薬学部祭費	160,000円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	741,000円
支部講演会支援金	100,000円
会議費	162,218円
通信費	160円
事務用品費	0円
金融機関手数料	28,817円
予備費	0円
小　計	2,674,049円
積立残金	2,929,062円
合　計	5,603,111円

九大薬友会予算

平成26年度　九大薬友会予算案(1)

【収 入】	
薬友会入会金（6000円×70口）	420,000円
年会費（3000円×900口）	2,700,000円
UFJニコスカード（3000円×67）	201,000円
預金利息	150円
小　計	3,321,150円
平成25年度繰越金	2,929,062円
合　計	6,250,212円
【支 出】	
年会費通知発送費	480,000円
球技大会補助費	40,000円
薬友会誌発刊費	800,000円
薬友会名簿発刊費	0円
インターネット同窓会システム導入初期費用	324,000円
インターネット同窓会システム利用料	194,400円
ホームページ管理費	240,000円
九大薬学部祭費	160,000円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	800,000円
支部講演会支援金	200,000円
会議費	165,000円
通信費	25,000円
事務用品費	1,000円
金融機関手数料	30,000円
予備費	100,000円
小　計	3,759,400円
積立残金	2,490,812円
合　計	6,250,212円

以上

博士（後期）課程　学位授与者一覧

（H26.３月　～　H26.10月）

赤嶺由美子　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
Various Drug-Transporters Related to the Fexofenadine Enantiomers Pharmacokinetics

岡﨑　裕之　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
Chronopharmacological study of mTOR signaling

小田　昌幸　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
Molecular mechanism underlying the dosing-time dependency of cisplatin-induced nephrotoxicity
（シスプラチン誘発性腎障害における投与時刻依存性の分子メカニズム）

柿本　啓輔　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
The study on the role of Cell cycle regulatory factor in the development of hepatocellular carcinogenesis via inflammatory response

Caroline Sunggip　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（創薬科学）
Role of P2Y6 receptor in Cardiovascular Remodeling

Benyakan Pongkitwitoon　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（創薬科学）
Development of immunoassays using single chain variable fragment antibodies against ginsenoside Re
（抗ジンセノシドRe小型化抗体を用いたイムノアッセイの開発）

荒牧　峻彦　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
Structure and function analysis of PriC, a replication restart factor in Escherichia coli
（大腸菌プライモソーム構成因子 PriC の構造及び機能解析）

毛利　優希　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
Association between thyroid hormones and brain function via regulation of microglial migration and phagocytosis
（ミクログリアを介した甲状腺ホルモンと脳機能連関）

白鳥（林）美穂　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
慢性的な痒みにおける脊髄アストロサイトSTAT3の役割

野口　泰徳　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
大腸菌染色体の複製開始複合体における DnaA タンパク質の機能制御と多量体形成の分子機構

Islam Ahmed Abd El-Hamed Ibrahim　H26.3.25
九州大学大学院薬学府（創薬科学）
Identification of New Angiotensin Ⅱ Type 1 Receptor Interactions with β-arrestin Biased agonists and Angiotensin Receptor Blockers
（アンジオテンシンⅡタイプ１受容体とβアレスチンバイアス型アゴニストおよびアンジオテンシン受容体ブロッカーとの新しい相互作用の同定）

山宮　育郎　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
Tegafur の 5-fluorouracilへの代謝活性化における立体選択性に関する研究

安倉　和志　H26.3.25　九州大学大学院薬学府（創薬科学）
亜鉛四核クラスターを用いた触媒反応開発及び配位子効果研究と新規不斉亜鉛二核触媒の開発

後藤　泰治　H26.5.31　九州大学大学院薬学府（創薬科学）
PDE4阻害剤の合成と医薬科学研究

長谷川千尋　H26.9.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
Utility of Population Pharmacokinetic and Pharmacodynamic Modeling in Anti-Osteoporotic Drug Development
（骨粗鬆症治療薬の開発における母集団薬物動態／薬力学解析の有用性に関する研究）

古賀　洋平　H26.9.25　九州大学大学院薬学府（創薬科学）
酸化損傷グアノシン認識分子の合成と認識能の評価

唐川　幸聖　H26.9.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
哺乳類におけるD-アラニンの昼夜変動解析とD，L-アミノ酸迅速一斉分析法の開発

濱﨑　智洋　H26.9.25　九州大学大学院薬学府（医療薬科学）
新規RNA干渉薬の創製と^{18}O標識を用いた核酸動態解析に関する研究

張　明　H26.9.25　九州大学大学院薬学府（創薬科学）
Studies towards a Short and Scalable Total Synthesis of (-) - α - Kainic Acid Using Pt - Catalyzed　Allylic Amination
（白金触媒によるアリル位アミノ化反応を活用した（-）- α - カイニン酸の短工程かつスケーラブルな全合成に向けた研究）

南　佳奈江　H26.10.31　九州大学大学院薬学府（創薬科学）
真皮線維芽細胞におけるオートファジーの加齢変化と真皮構造に及ぼす影響

人　事　異　動

異　動　日	所　　属	異動内容	氏　　名	職　名	異動前の職業又は異動後の職業
平成26年１月１日	生物有機合成化学	昇　　任	谷　口　陽　祐	准教授	同分野助教から
平成26年１月１日	創薬育薬産学官連携	係・講座の変更	濵　瀬　健　司	准教授	生命薬学講座生体分析化学分野准教授から
平成26年４月１日	生体分析化学	採　　用	田　畑　栄　一	助　教（年俸制）	同分野学術研究員から
平成26年３月31日	創薬育薬産学官連携	退　　職	冨　田　拓　郎	助　教（テニュアトラック）	4/1　自然科学研究機構　岡崎統合バイオサイエンスセンター
平成26年４月１日	医薬細胞生化学	育児休業復　職	杉　本　のぞみ	助　教	育児休業期間H26.7.23～ H26.3.31
平成26年６月１日	ライフイノベーション	昇　　任	津　田　　誠	教　授	薬理学分野准教授から
平成26年６月24日	生物有機合成化学	育児休業	阿　部　由紀子	助　教	～ H27.3.31
平成26年10月１日	生物有機合成化学	採　　用	渕　　靖　史	助　教	九州大学大学院薬学府創薬科学専攻博士後期課程退学より採用（阿部助教の支援教員）
平成26年10月１日	薬　　理　　学	理事就任	井　上　和　秀	教　授	～H28.9.30
平成26年10月24日	システム創薬学	育児休業	田　畑　香　織	助　教	育児休業期間H26.10.24～ H27.3.31

同窓会公式ホームページのご案内

Bikita　母校・同窓会の情報が満載！

https://www.bikita.jp

同窓会員の皆様の日常的なコミュニケーションの場となるSNS形式のホームページを運用中です。
懐かしい再会、新しい出会いの場として楽しくご利用ください。

会員の皆様に確実に情報をお届けし、会員でない方との区別をするためログインIDを交付します。
ID・PASSについては同封の振込用紙宛名面をご覧ください。

初めてログインすると会員登録画面となりますので必要事項を入力し登録完了してください。会員登録をすると会員限定の記事が表示され、右の機能をご利用いただけます。

PC・スマートフォンから

九大薬友会　Bikita　検索

携帯・スマートフォンから

QRコードから https://www.bikita.jpにアクセスします。

あなたが登録した内容が表示されます。(変更可)
友達の名刺を、名刺一覧から探してみましょう。

友達の名刺からメッセージが簡単に送れます。
受信通知をEメールに転送できます。

住所変更
転勤・引っ越し・結婚などで住所やお名前に変更がある場合はセキュリティフォームメールからお知らせください。

バックナンバー
薬友会誌、評議員会議事録のバックナンバーを電子化し掲載しています。

ID発行申請
ID・パスワードが分からない場合はフォームメールからお問い合わせいただけます。

バナー広告募集中
あなたのホームページにリンクします。詳しくは「広告について」からフォームメールを送信してください。

広くお知らせしたい情報は掲示板に書き込みできます。操作はとても簡単。作成内容はすぐに確認でき、後から修正もできます。

コミュニティは会員が自由に参加・コメント・開設できるグループ掲示板です。同じ回期・クラス・部活動・同じ趣味の人などで交流を深めよう！

自分で話題を作り、メンバーから書き込んでもらうトピックに、日時や場所を加えて出欠確認ができます。

※同窓会コミュニティサイトBikitaは小野高速印刷(株)が運営管理し、薬友会事務局と正式に利用契約を結んでいます。会員のご利用は全て無料です。(通信料は利用者負担です。)

編集後記

皆様いかがお過ごしでしょうか。「会長挨拶」にもございますが、薬友会では、ホームページ（Bikita）をリニューアルいたしました。Bikitaは、会員限定のコミュニティを構築できます。是非ログインして頂き、同窓会など交流の場としてご利用頂ければ幸いです。

今回の薬友会誌の作成にあたり、薬学研究院各分野の先生方、ならびに学生係等の職員の方々、薬友会各支部の方々にご協力頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。今後も薬学研究院、薬友会への変わらぬご支援をよろしくお願い致します。